

329-49

19

新釋  
近松傑作全集  
二  
挿圖

明治  
43. 7. 18  
内交

水	島	幸	饗	坪
谷	村	田	庭	内
不	抱	露	篁	道
倒	月	伴	村	遙
(論序選共)				

水谷不倒 (校訂註釋)

右之本令吟覽頌句音節墨譜  
 等不殘毫厘令加筆候可有開  
 版者也  
 重而予以著述之本令校合候  
 畢全可為正本者歛

竹本筑後掾

近松門允衛門

大坂の藤屋三平

栗屋山本九兵衛版

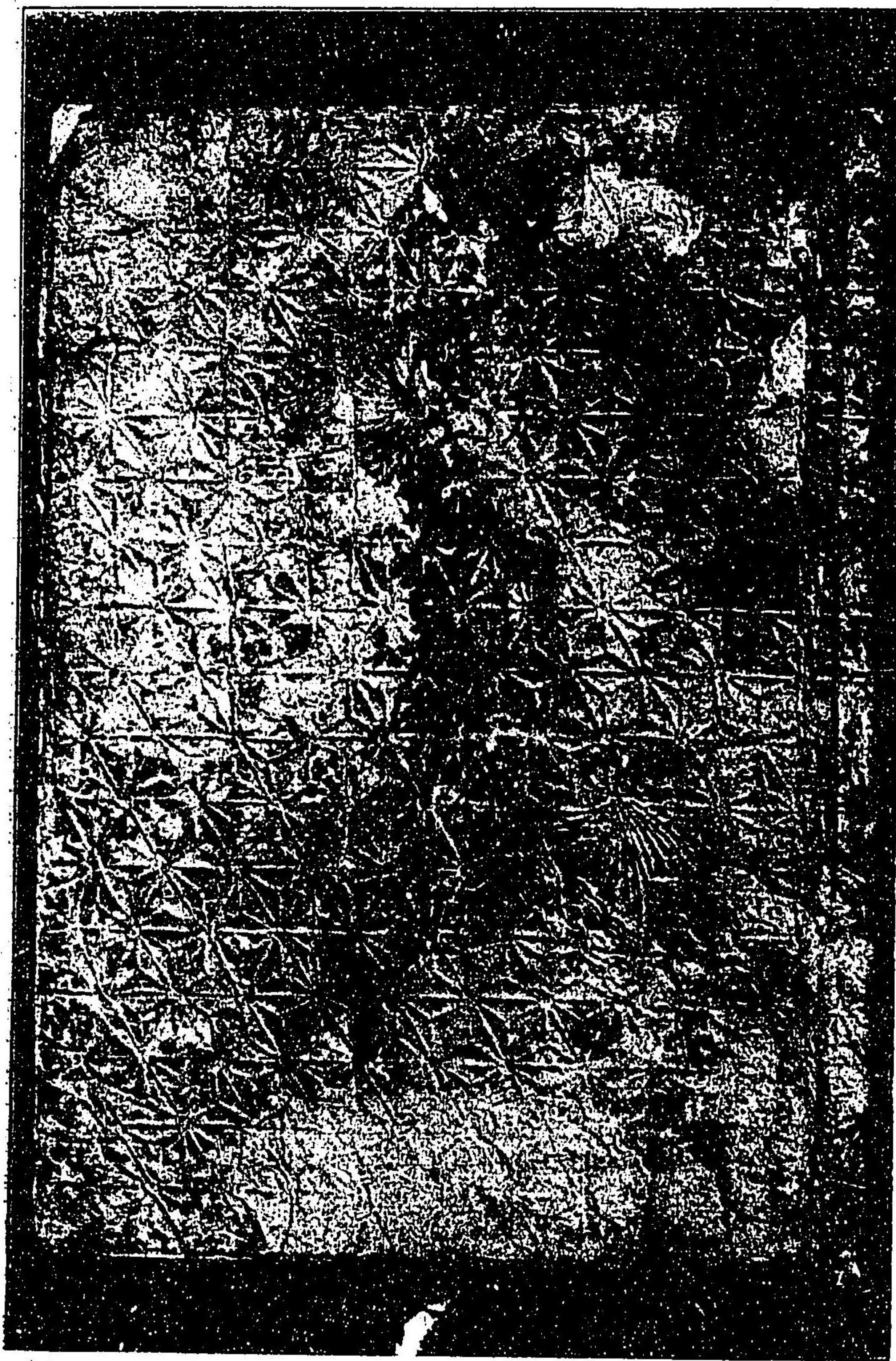
山本九兵衛版



二の附番繪「壹性園」



一の附番繪「壹性園」



紙表の「節泉冷氏源」

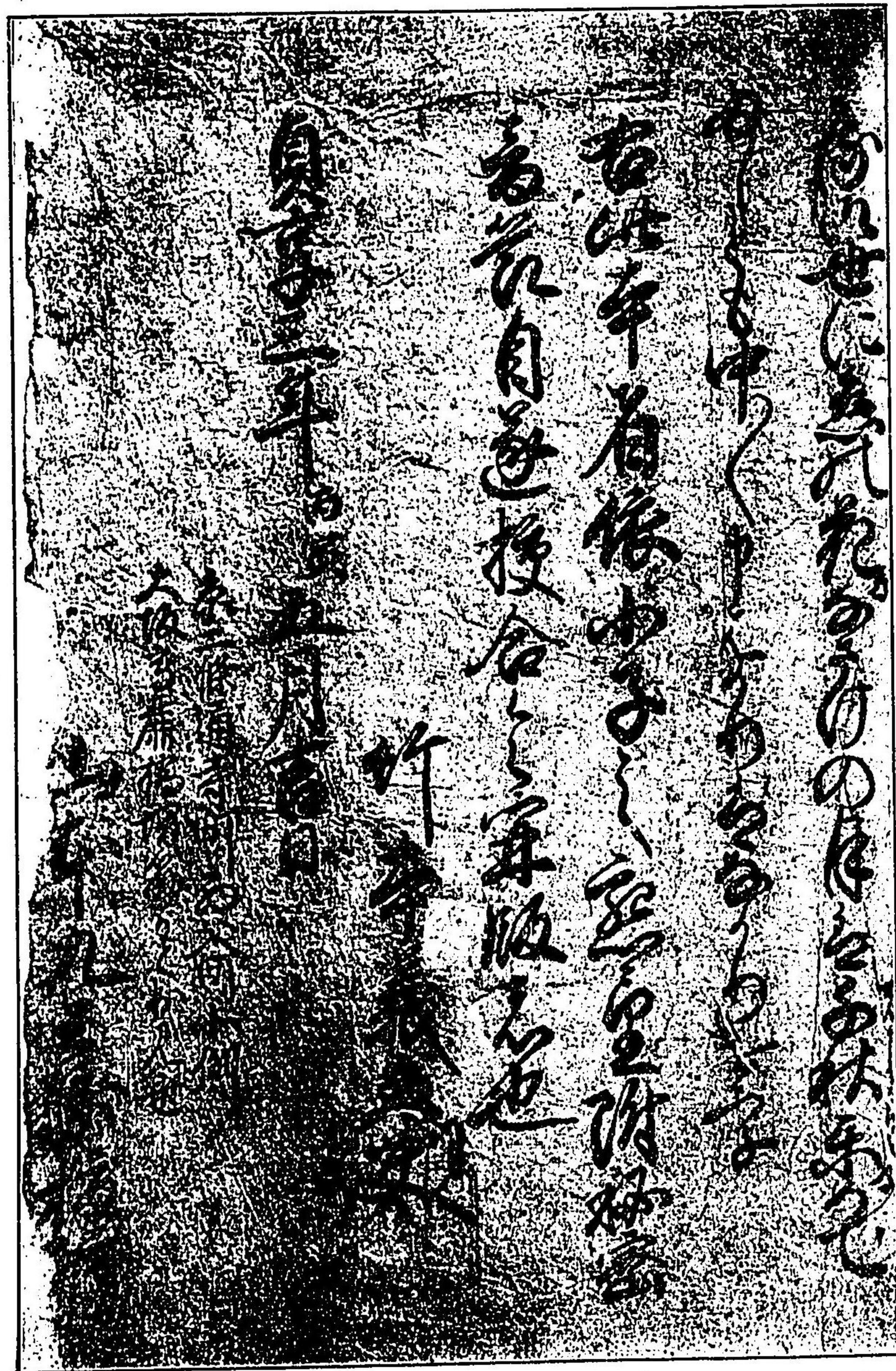


三の附香給「遊性園」





(本藏氏亭霞邊波) 給口の記平太盤基



三 世 相 奥 附









(大久保紫香氏蔵本)

新釋  
挿圖

近松傑作全集第二卷目次

一、壬生大念佛……………	一
一、出世景清……………	五三
一、三世相……………	一一九
一、松風村雨束帶鑑……………	二〇一
一、兼好法師物見車……………	三一三
一、碁盤太平記……………	三七三
一、お十郎五十年忌歌念佛……………	四二一
一、お次郎今宮心中……………	四八三
一、心中又は氷の朔日……………	五四三
一、お梅川真途の飛脚……………	六〇九

一、おきか生玉心中……………六七

二、心中天網島……………七四

(近松傑作全集第二卷目次丁)

# けいせい壬生大念佛

## 解題

此の狂言は、都萬太夫座にて、元祿十五年三月二の替りに、近松の脚色したるものに、「傾城佛の原」と共に坂田藤十郎の當り狂言の一なり。今年年の評判記「役者二挺三味線」に據りて、其の時の重なる役人を擧ぐれば左の如し。

高遠	偽民	高遠	偽民	坂田	藤十郎
後室	彌彌	後室	彌彌	三笠	城右衛門
みやげ	彦六	みやげ	彦六	玉川	千之丞
弟大藏		弟大藏		中村	四郎五郎
傾城道芝		傾城道芝		山村	長五左衛門
か		か		霧浪	千壽
姫		姫		淺尾	十次郎

(1)

瑠璃 瑠璃 姫  
妻 おみ つ

鈴木 辰三郎  
嵐 喜世三郎  
金子 吉左衛門

等にして此の狂言當りしかば、其の後日三の後日等出たりといふ。こゝに掲げたるは、書おろし當時の筋書にはあらず、坂田藤十郎の歿後に、大和山甚左衛門が、藤十郎の役に扮したる時の筋書なり。蓋し甚左衛門は寶永三年大阪より京都早雲座へ上り、坂田藤十郎と一座して藤十郎の知遇を受け、彼れの配下において傳授を受け、やつし藩事の名人となり、藤十郎歿後は、彼れの當り狂言は概ねこれを演じて、喝采を博したりといふ。さて甚左衛門が「壬生大念佛」を演じたる時を調べ見るに、正徳元年の秋、萬太夫座において「佛の原」と此の狂言とを三日替りに演じ、甚左衛門は梅永文藏、高遠民彌に扮し、洛中の見物に藤十郎の俤を偲ばしめたり。但し此の狂言の役割を見るに、早川初瀬など當時江戸に在りて、上方にはをらざる俳優の名あれば、此の筋書はそれよりも後、正徳の末享保の始め頃、再び甚左衛門が同じ狂言を繰返したる時の筋書なるべし。此の狂言の書下しの時の筋書は、去年近松展覽會

の時、高野辰之氏の出品中にあり、同書は上中下三冊ものにて、狂言本としては珍らしく長編なりしが、惜むらくは上中のみにて下の巻は缺けたりと覺ゆ。匆卒の際とて、一讀するの逸なく、爲めに此の筋書と何程異なるやを比較し能はざるも、彼れは三冊此れは一冊なれば、省きたる所あるはいふまでもなし、例へば書下しの役割には傾城道芝に霧浪千壽が扮しをれば、此の役は餘程重き役なれども、此の筋書には蔭となりて、役人も所作もなきを見れば、高遠民彌が鳥原にて傾城狂ひの一場は省きしものなるべし。されば近松作としては、完璧にあらざるも、此の作の骨子ともいふべき壬生狂言の一條は、原作と大差なかるべければ、收めて以て此の狂言の大略を窺ふの便に供したり。

### けいせい壬生大念佛

上 みづのへみづのとのめうと振分がみ  
下 ひのへひのとのめうとしんるのいつゞ

●玉川千之丞 花車方。寛文頃の名優の名を譲られたれど、中位の役者にて餘り香しからず。但し元禄十五年三月、此の狂言書下しの時、高遠後室に扮し、今回前興行の時の役者にて残るは此人のみなり。

●早川はつせ 女形にて上々吉。元禄十三年江戸に下り、正徳三年大坂へ歸る。

●山村歌左衛門 \*

- 一 高遠の後室 玉川千之丞
- 一 娘 るり姫 花川ちよの
- 一 手かけおみよ 大夫 早川はつせ
- 一 腰元の花川小せい 一腰元の おのへ若松
- 一 高遠大藏 賀懸 三尾木儀左衛門
- 一 小姓數馬 芳澤 咲の介
- 一 同じく左近 淺尾 久松
- 一 みやけ彦六 立役 山村歌左衛門

●大和山甚左衛門 始め小間新左衛門と稱す。寛永二年大坂若井座

●芳澤あやめ 水木辰之助、荻野八重桐と並び立て女形の名優。慈恵地盤に妙を得たり。

●菊田善右衛門 中位の敵役。

- 一 徒侍十五右衛門 道外 松島茂平次
- 一 同坂田常左衛門 一侍 山岡藤左衛門
- 一 おくだくはん兵衛 淺田 藤七
- 一 高遠にせ民彌 敵役 菊田善右衛門
- 一 おくかつ姫 若女 山村歌之介
- 一 めのとおらん 大夫 芳澤あやめ
- 一 いもとひむろ 是新太郎役也 玉川金太夫
- 一 小 はる 霧波おのへ
- 一 こ なつ 宮崎竹三郎
- 一 小 きく 菊川京之介
- 一 中九郎間 岡島元右衛門 一つばはぎの彌七
- 一 かず買八兵衛 座本 大和山甚左衛門

にて大和生れなればとて大和山と改姓し、次で翌三年京都早雲座へ上りて名を其左衛門と改む。此時坂田藤十郎と一座し、藤十郎に見込まれ、傾城買の傳授を受け、やつし儒事の名人として藤十郎の傑を存し評列よし。正徳の末上々吉となり、享保六年七月歿す、年四十五。

●地藏、猿、女と坊主の面、  
れも壬生狂言に入川の面、  
いづ

# けいせい壬生大念佛

上

備後の國主、高遠某の小姓、星川左門、弟右門兄弟は、地藏菩薩、并に猿の面、女と坊主の面を臺に載せ、瑠璃姫の屋敷へ來れば、腰元よどの同なびか立出、お二人様は此間ほどれへ御越なされましたぞ、左門聞、さればお姫様より大事の御用を仰付られ都へ上り、只今歸りました、こなた衆へ心得のため申て置、先此お家と申は、昔新田義貞公の時代に、御先祖かう王新左衛門尉高遠様には、都の戦敗北し、今は是迄と高遠は、

●地藏薩埵 大慈悲深く種々に分身して六道能化を司る佛。

●ぞうちやう 定朝なるべし。定朝は壬生寺の本尊地藏菩薩の座像を彫みし佛工なり。

●概目 家督相続のこと。

●國遠 家出又は出奔などいふに同じ。

日比念じ奉る地藏薩埵の前にて腹切んと、壬生の堂へ走り入、南無六道能化の地藏菩薩是迄なりと、すでにかうよと見へ給ひし時、忝くも地藏薩埵一人の僧と現れ、多くの敵を追退け給ふゆへ、其場の難を免れ、遂に戦に勝利をえ給ふ、さるによつて代々高遠の何がし様とは申也、それゆへぞうちやうの御作一寸八分の地藏菩薩を、此お家の寶とし、是がなければ繼目の參内がかなはぬ、御惣領高遠民彌様には、都島原の道芝といふ傾城に戯れさせ給ひ、明暮大酒を御好なされ、放埒なる身持ゆへ、國へ歸り一國の主共あらふものが此身持にては、民百姓に笑れんはなんぼう無念に思召れてか、國遠なされお行方が知れぬ、大殿様お果なさる

(9)

壬生大念佛



九

(8)

壬生大念佛



一ノ繪挿御念大生壬

●壬生大念佛 壬生寺は京都大宮西四條の南にあり。寶鏡寺と號す

時分、瑠璃姫様御隠居智量院様おちご大藏様を枕元へ召、何とぞ此民彌が行方を尋出し、心だに直りなば、此家を繼すべしと、地藏菩薩をこめし寶藏の鍵を、瑠璃姫様へお預けなされ、涙ながらお果なされた、いまだ其御愁傷もやまざるに、御隠居と大藏悪心を企み、其地藏菩薩を盗み取、此お家を押領せんと有事を、瑠璃姫様の御存有て、此度地藏様を御作りなされ、此内へ御寶の一寸八分の地藏菩薩を籠めおかせ給はんとあつて、此地藏菩薩をお作りなされた、何と御發明な御智恵ではござらぬか、弟右門申は、其上お姫様には、お果なされし母上様の御菩提のためと有て、はゝ見たくと申壬生大念佛を修行なさるゝ、それ故此猿の面

本尊地藏菩薩、毎年三月大念佛あり、其の起原は、後伏見天皇の正安年中、則覺上人此の寺に住し、臨陣念佛を修したるが、今に傳はれるなり。毎年三月十四日より廿四日に至る大念佛修行の間、所の人集りて狂言を備す、これを壬生狂言といふ。狂言の番組二十五番あり。桶取、花盗人、紅葉狩、狐釣、猿、雲石、頼光山入、盲川渡、節分、鶴、開角力、餓鬼、猿引、さいの川原、曾我、性悪坊主、羅生門、棒しばり、船坂、花見、男伊達、棒振、炎の上、湯立、燈籠刺是なり。其の内にも猿、桶取等最も有名なり。

は、則壬生の狂言を御うつしなさるゝに付、都の面打に打せて参つた其段を仰上られて下され、扱は左様でござりまするか、お姫様へ其よしを申上ん、こなたへと打連皆々奥へ入にける、かくて下屋敷にて、壬生のでいを學び猿の渡る綱を張り、鉦打叩きはゝみたくと、大念佛を始め給ふ、瑠璃姫は乗物に召、徒侍御供申せば小姓大學左門右門御迎に出れば、姫乗物より出給ひ、おれは都へ上り見たが、ほんに壬生に其まゝじや、扱願をかけし者は、面を着て願主が狂言をする、おれが名代に誰ぞ狂言をさせよ、大學聞、外へ聞へてはいかなれば、徒侍の衆がようござりませふ、壬生の狂言を覺へた衆は出でなされ、十五右衛門承り、大殿様御

● みたくと聞ゆるにや。

● 鉦打たしき 念佛の時に打つ鉦なり。

● 桶取 前に述べたる二十五番の内に入り。女にぬれるは女に惚れるといふに同じ。

● 寶引 \*

堅固の時御供申都へ上り、壬生の狂言を見物いたし覺へてをります。姫聞召、そんならおけ取と云狂言は、女に出家がぬれる事じや、其出家の役を見事せふか、成程致しませふ、そんならこしらへよ、畏りましたとかしこへ入、女には誰がよからふ、兎角闖取にあつた者にさせふと、寶引繩を取出し、此だい／＼を取た者が成ぞと取し給へば、三宅彦六あたり迷惑がる、姫ははてむつかしい事はない、此桶を手持て、小襦を取、しやでんでくと囃と、ちよこ／＼あゆむ迄じやと、して見せ給へば、彦六せひなく女の髪をかつき、小袖を着かへ面をきて、桶を持出れば、出家の役人立出、桶取の狂言をする、所へ繼母智量院弟大藏來り、

● わんざん 無理難題をいふ事なり。玉柳筒に、姑はわんざんなるものに極め、摺子のくぐいものに落しつけたる様もとあり。

● 自力 は自己の作業修福、他力は彌陀如来の本願力。即ち凡夫の極樂往生を遂ぐるは、自己の作業修福の故にあらず。彌陀如来の本願力によるものなれば、瑠璃姫がひとり地藏菩薩を信心するもそれは自力念佛にて役に立すとなり。

さて／＼是や何事じや、是姫そちはは／＼みた／＼といふ念佛を申と有、それ程母が見たくば、毎日來ておれを見たがよい、但は母を呪ふての事か、大學聞、是はわんざん成事を仰られます、お姫様にはお果なされた母御様のため、母見たくと申壬生大念佛を御申なされます、大藏聞、いやさ姫がの自力念佛で役にたぬ、内々寶藏に有地藏菩薩を取出し、諸人に拜せよ、すれば他力といふもの、それを承引せず拜さぬは、何と自力念佛でないか、姫聞、是はおち様の無理計り仰られます、何無理を云、身は遂に人に無理じやといはれた事がない、様子を承はらふ、されば地藏様の事は、父上様のお果なさるゝ時分、私母様お前を枕元へ召て



地藏菩薩は兄民彌様の行方を尋ね、兄様へ渡せと有て  
 鍵をお渡しなされた、其時母様のおつしやるには、末  
 々になり、たとへおれが拜まふと云ふ共、鍵を渡しや  
 んなどおつしやつた、叔父様も其通に云ておいて、今  
 地藏様を出し拜ませよとは、無理ではござんせぬか、  
 聞へぬ事計りおつしやると涙ぐみの給へば、繼母聞い  
 かにもさふじや、あやまつたく機嫌をなをしてたも、  
 やい腰元共姫を奥へ連れて行けといへば、何しに腹が立  
 ませふぞ、母様も叔父様も奥へ御入なされ、さうでも  
 あがりませと、姫は腰元引連皆々奥へ入給ふ、彦六は  
 桶取の面取り、女の姿にて歸るを、大蔵見てこりやま  
 てく、腰元ならば姫と一所に奥へ行はづよ、一人表

●入性根

入智恵といふに同じ。

へかへるは合點がいかぬ、名は何と云ふ、私は彦六、  
 何女の名に彦六とは、いや彦六が女房でござります、  
 大蔵聞、彦六が女房なれば歸さぬと、鎗おつ取突かく  
 れば、繼母は先殺しやんなく、是は迷惑な、何の咎  
 有てかやうにはなされませ、されば徒侍の内に三宅彦  
 六といふ奴が、我々が事を悪さまにいひ、姫へ入性根  
 すると聞た、なんの左様な事がござりませふぞ、彦六  
 は徒侍なれば、お姫様の側へよる事も成ませぬ、いや  
 さ彦六といふ奴は、先徒奉公などする奴でない、松山  
 におゐては、鎗をつかせ乗替の一疋もひかせた、れき  
 くの侍であつたれ共、其身が悪性で主の娘と不義密  
 通をし、國を立のき民彌が屋敷に居る時、是へかけこ

(16)

み頼みしゆへ、かくまひ命を助し、民彌に其恩をうけしゆへ、わざと徒侍に成て居て夜るく瑠璃姫が室へ行き相談をする、其上瑠璃姫と密通して居ると聞た、ついに目見えをせぬゆへ顔は見知らぬ、様子をまつすぐにいへ、私は去年から彦六と夫婦に成ました、扱は彦六には國に女房がござりますよな、其上お姫様共密通とや、扱腹立やく、人中へ出る人じやと思ひまして、着る物の洗濯も、さつはくとして着せましたに、私とは只中が悪ふござんして、いねがしの様に計りいたします、今思ひ當りました、左様な事とは存ませず、今朝いさかひまして、暇を取て参りました、憎いやつの喰付て成り共、此恨をいはねばおかぬと腹を立れば、

●おふする

逢けるの意。

(17)

扱は夫と縁を切たか、すれば彦六を殺しても恨には思はぬか、どうぞころしたふ思ひます、む、姉じや人は幸じや、ないくの事を此女を人談合せふ、やい女大事の事じや、此事をしおふするとよい男をもたし、樂々に暮させふが頼まるゝか、何事成り共承りませふ、然らば姉じや人は瑠璃姫に、ひたすら地藏様を拜ませよとの給はゞ、是非なふ藏を開るであらふ、所を某藏の内にて瑠璃姫を突殺す、其時そちがいはふは、なふ悲しやこちの彦六殿が、姫君を殺し立退たとよばはれ、其時某罷出、彦六は姫が敵じやといふて、引出し首をうたふ、瑠璃姫彦六を殺せば、此家は身が物、時にはそちを身が女房にして、安樂に暮させふが、なんと頼

姉き

兄貴叔父貴などに同じ。

まれてくれまいか、何が扱心えました、していつの事  
 でござります、則今夜の事じや、それは餘り急にごさ  
 んす、最前お姫様といひぶんをなされました上で、地  
 藏様を拜みたいと有ては御承引有まい、廿四日は地藏  
 の御縁日なれば、それにことよせ仰られませ、いへば  
 尤じや、今二三日の事なればそれ迄待たふ、然らば姉  
 きは奥へ入、姫と中よふし給へ、やい女よ、そちは身  
 が屋敷へ同道せふ、しばし待て居よと、侍引連皆奥へ  
 入にける、彦六は只一人残り居て、女の鬘取り、小袖  
 めぎ捨て大小さし、思はずも女の體にて有しゆへ、一  
 大事を見付た、某事は民彌殿に恩を深ふ蒙むつた故、  
 民彌殿屋敷を出給ふ時、是非供をせふと申たれば、心

ざしは過分なが、一人の妹を屋敷に残し置ば、其方は  
 是にとゞまり、瑠璃姫が身の上に大事があらば頼むと  
 有一言ゆへ、わざと徒侍と成り、夜々姫君の御室へ行  
 諸事の談合をなすに、身が彦六が女房じやといふたれ  
 ば誠にして、企のしなを皆いふた、是ひとへに地藏薩  
 埵のおかげ、扱々恐ろしい企や、何とした物であらふ  
 と、思案する所へ、瑠璃姫出、なふ彦六、今母様の奥  
 へござつて、先程のは悪かつたとおつしやる、あの御  
 心なれば御ちよさいはないとあれば、扱々おまへは結  
 構な御心じや、私は桶取の女の姿で居ましたれば詮議  
 にあひ、彦六が女房じやが、暇を取たと申たれば、談  
 合に入り申すには、無理に地藏菩薩を拜まふと云て、

●やくたい

\*

こなたの藏へ取に入給ふと、叔父の大藏が捉へ、こなたをくつと突き殺す。時に私には彦六が姫を殺したとよばはれ、其上で彦六も殺すとの相談じやといへば、なふ悲しや何とせふ、最早家中も一味であらう、死るを覺悟したがよいと、ふるひく南無阿彌陀佛との給へば、是はやくたいもない、今夜ではない、廿四日の事に延しておいた、たとへ一家中が一味しても、此彦六が居るからは氣遣はさつしやるな、何をいやるぞなんぼわがみが強ふても、大勢と一人してはかなはぬぞ、死ると云に違はないとふるひ給へば、先廿四日迄此屋敷には居ませぬ、今夜の内にこなたを連てのきまする、およい思案じや、さあそんなら今退きませふと、ち

よこく走りして出給へは、今退ては番の者が咎める、扱御寶の地藏様を藏より出し給へ、いや藏にはござらぬ、どこへやらしやつた、されば叔父御が念がけさつしやる故、取出してあの地藏様へつくり籠て置ました、でけましたく、然らば晩に、九つの太鼓がならば、地藏様を護りまして、あな門へ出てござれ、おれが迎ひに來まするぞ、それ迄人にさとられぬ様に、三味線や琴でも弾て慰んでござれと、云合立歸れば、姫は奥へ入給ふ、こゝに腰元のおみよは、地藏菩薩を盗出し、民彌様の行衛を尋ね渡さんと、女心の一筋に、壬生狂言のため張置し、大綱へ手を懸け飛上り、繩を傳ひ藏の窓より内へ入にける、其跡へこほり新太郎旅姿にて

来り、案内乞へば小姓大學立出、どなたでござるぞさ  
 ん候私義は、民彌様と云名付有勝姫が家來、こほり新  
 太郎と申者でござります、吉左右の御使に参つた、誠  
 に民彌様行方なふ御成なされし故、御祝言も延々に成  
 し所に、此度民彌様は淺ましい紙子一てんの御姿にて、  
 姫が屋敷へ御入なされし故、此方には待まふけたる花  
 婿様でござれば、早速姫と一所にいたし、民彌様は此  
 方にござります、扱御國へ御入なされませふけれ共、  
 今迄身を放埒に持たる故、いかにしても其儘は歸りに  
 くいと有故、先私が御使に参りました、御前の首尾頼  
 上ます、則御状も参りましたと差出せば、扱はこなた  
 の館にござりますよな、はてお目出度や、此御状は御

●一腹一生  
 こと。同じ腹から生れたる

隠居、叔父大藏殿へ計りて、瑠璃姫方へは参りませな  
 んだか、一服一生の事なれば、姫方へ参りさふな物と  
 存ます、御尤でござりますが、お言傳とてもござりま  
 せぬ、私が存ますには、御妹君様は御身中の事ゆへ、  
 御隠居様の思召もいかゞと、わざと御文が参らなんだ  
 物でござりませふ、大かく聞、實に左様でかなござり  
 ませふ、御返事の出ますはしばし間もござりませふ、  
 しばらく御待なされませと、大かく奥へ入にける、し  
 かる所へおみよは、藏の窓より出、繩を傳ひ降んとす、  
 新太郎きつと見、やあ盗人よ侍衆とよばはれば、なふ  
 聲わ立て下さんすな、私は此屋敷の腰元でござんすが、  
 藏の内で様子を聞ませすれば、おまへは民彌様と云名付

有る、勝姫様の御家來新太郎様、殿様はおまへの方に  
 ござんすとや、わしは民彌様の此お屋敷にござりまし  
 た時、お氣に入かはゆがられました、おみよと申者で  
 ござんす、むすれば殿様のかはゆがらしやつた時々  
 か、其時々がなぜ藏へははいつた、されば此お家には  
 一寸八分の地藏様が寶物で、是が無ければ繼目の參内  
 がならぬ故何とぞ盗み出し民彌様へ渡さふと存まして、  
 取に這入ましたと一々様子をいへば、扱はさふかと下  
 へおろし、地藏の厨子を受取開き見て、是は地藏様が  
 ない、取落して來たさふな、今一度藏へ入尋ねておじ  
 や、いや最前おまへの御叱なされ繩をゆすらしやんし  
 た時、落まいと思ひ手へ力を入ました故、筋が違ふて

●厨子 佛像を安置するもの。佛  
 箱のこと。

あゝ痛たく取附れませぬはて氣の毒や、よいく身  
 が行尋ねてこふ、人が來るか見て居よと、繩を傳ひ飛  
 上り、窓より藏の内へ入にける、人音すればおみよは  
 かしこへ入、瑠璃姫は九つの太鼓打は、彦六と合圖な  
 れば、身拵へして出給ふ、所へ繼母大藏立出、是々姫  
 何しにこへ出給ふぞ、いや藏へはいらふと存まして、  
 むゝ扱は地藏菩薩を拜まさふや、さあ這入給へ、いや  
 藏の鍵を、夕べ盗まれてござんせぬ、何を嘘計りと懷  
 へ手を入取出し、是程有物をと、藏の錠をあければ、  
 繼母は無體に姫を藏へ押入、それ殺せ、心得たと大藏  
 飛入所へ、新太郎つと出、どこへく、身は殿と云  
 ひ名付の勝姫家來、こほり新太郎といふ者、何故瑠璃

●お家流 伏見帝の皇子青蓮院尊  
 四法親王能書におはしまして書法  
 一變せり、其の御座所よりいへる  
 稱にて、正しくは御家一流なり。

姫様は殺すぞ、おゝ新太郎ならば様子は知るはずぞ、  
 そちが持參の狀に、瑠璃姫と彦六密通し民彌を殺さふ  
 とする、それ故國へ歸らぬ、二人を殺す様にとの狀じ  
 や、あら心得ぬ、左様の使ならば、身に仰有はつじや、  
 民彌様の手は見えて居る、狀を出し給へ、是見よとほり  
 出せば、新太郎見て是は直筆じや、是姫君よう不義を  
 なし給ふぞ、なふなさけない覺へがないと文を見て、  
 是は民彌様の手でない、兄様はお家流で柔かな手じや、  
 此様なきつい手ではない、屋敷に書て置せ給ふ物が澤  
 山に有引合て見や、新太郎聞扱は是は民彌様の手では  
 ござりませぬか、はあ是が違へば此方へござつた民彌  
 様も、偽民彌じや、外の者ではないかいの、そち達が

いとこか、はとこを民彌様と云てこし、瑠璃姫様と彦  
 六が不義有といふて、身に狀を持しておこし、兩人を  
 殺させて後では二か國共に、ぬくくと取ふとは、扱  
 も恐しいたくみかな、勝姫様には日比戀しくと御召  
 てござるゆへ、ふかくと御夫婦になした、悪人共が  
 謀にのつて、是迄使に來たかるゝ口惜い、いやく  
 口惜うもない、某が使に來ればこそ、かやうのたくみ  
 を見あらはした、此上は瑠璃姫様を連歸り、詮義して  
 おのれ等を殺すぞ、大藏聞あらはれたからはよいく、  
 日比氣にかゝる新太郎を一所に討て取れと、侍大勢取  
 まはせば、心得たりと姫を圍ひ、さんぐくに働け共、  
 姫君をかばひ詮方なく、藏へ飛入内より戸をさして居

る、侍共戸を破らんと大勢立かゝる所へ、彦六一文字に駈付け一々に取て投げ、二王立につゝ立ば、新太郎窓より首さし出し、こなたが彦六殿か、身は新太郎と申者じや、姫君は是にござるぞと、下へおり蔵を開き諸共切て出れば、小姓大學地藏菩薩を護り奉り、是お姫様是が大事じやと、左門右門御供申せば、繼母うろたへ來り、蔵の内へにげ入る大蔵もにげ來り、綱へ飛上り蔵の窓へ入らんとするを、彦六追駈來り、大蔵が足をしつかと取れば、あゝゆるして下されませと慄ひ居る、瑠璃姫は是々彦六、いふても母様叔父御じや、命を助けてたも、彦六聞、實に民彌様御留守の内なれば、命は先助け置くと、足の毛をむしり様々なぶり、

綱へ搦めそれに緩りとござれと、瑠璃姫の御供申、新太郎彦六は勝姫屋形へいそぎける

下

誰を待つやら黄昏時に、かどにくゝかどに立との、にしきゝかいの、よるたちやる、俵こもを一荷に酒樽一つ荷ひ、古編笠に古帷子、片肌脱で、御糟、おうば様糟はごはんせぬかと、酒に酔つゝ千鳥足、さる下屋敷へ立寄、三味線小歌の音を聞き、小歌のかす買ひませふ、お姫様の伽羅のかすでも買ひませふと、ひよろゝとする所へ、新太郎が妹ひむろ、枝折戸あけ立出るとて、俵の繩へ足をかくれば、かゝつたゝお山が



かゝつたといふを、漸はなして奥へ入れば、勝姫は腰元共を引連れ出給ひ、いつも来る酒の酔かと様子を見給へば、糟買ひは編笠脱て下に居、酒樽出し太夫様じやく、太夫様のおなかへ悪いやらどぶくするど、茶碗へ酒をうけ、太夫様が茶碗に八分めにならしやつたとつゝとほし、手樽を逆にして、さあ道中じやくと、樽を歩ませ、太夫様のゑちかりまたじやく、揚屋人それ蒲團を敷けと、編笠を敷、樽をのせ、さあ太夫様床入じやく、寝ませふと、樽を抱きねころび、樽の手をいらい、太夫様のみよはなかい、是は名譽な下に穴があいて有、いつもの穴じやく抱いてね、正體なくも酔臥居る、勝姫は御覽じ、人は詞一言で知るゝといふが、

生付た卑い者とは思はれぬ、酔てたはことにも女郎の事計りをいふ、酒を好て呑ふならば、あの様に酔ふたがよささふな、奥にござる民彌様は、傾城狂ひをなされたお方なれば、定めて心もしやれて、女をきつうかはゆがらせ給はふと思ふて、早うあいたかつたが、扱も戀もなさけもない、不束なお方じやく、酒まゐるにも色もなふつゝと呑つしやる、酒を飲にも色々が有、色もなふ飲むをてんほ酒、我は飲まね共、人に強られて飲むを、けしき酒と云、或はいらち酒のしんき酒のわさくれ酒のといふ、あの者は女郎の事を思へ共、思ふ様にはならず、しんきが湧くゆへ一つなふて忘れふと思ひ、心がいらち、よいは儘よと一つ飲み、傾城故

に、飲みくづをれた、わざくれ酒といふのじや、好た男じや、あの酒の酔を内へ呼へ近付にならふ、ひむろ聞、強う酔ふて居をります、いらぬ物でござります、大事ないひらに呼へとあれば、腰元共立出、はお姫様の近付にならふと仰しやる這入りや、何姫とは誰じや、太夫除て近付はいらぬといへば、太夫じやといふてよへの給へば、腰元は是太夫様の近付にならふと仰しやるといへば、何太夫が近付にならふといふか、心得たと古羽織を着さあどこに居ると、柴折戸の柱に行當り、是を取て除よ、邪魔で這入れぬと、くるりと廻り外へ出れば、是こちらじや内へおじやと、手を取入れば、腰元共を見て、こりや禿のたつ彌め、いつ斯う成

●仔細あつて  
が如し。

わけあつてといふ

りおつたどれ□□はせ、遣手めが睨み居るは、是太夫どうじや、賣やるのく、おれにも一つ賣たも、仔細で物をいはぬの、勝姫合手になり、こなたの國はどこぞ、我らはりんごの者にて候、りんごとは、はて疊の出る所じや、そりやびんごじや、さあ備後じやといふにりんごと云をるはい、どこの傾城を買やつたぞ、道心者の居る向ふの傾城を買た、手に錫杖を持、片手に玉を持て居た、名は二さうといふ、腰元共聞き地藏で有ふが、さあ地藏と云に、おのれが二さうと云をる、おれが親は壬生の堂を後へ引かせた、其奉行に上つた、堂の縁から見たれば、向ふに此様な物がつと出て有と、片手指上、それに五段屋根が有た、腰元聞きそれ

(43)

は東寺の塔じや、さあ其脇に大きな屋敷が有る、そこへ行たれば、美しい女郎が歩いて来た、太鼓打に問ふたれば、太鼓持であらふが、それ／＼それがいふには七十六匁といふた、おれも六匁七分迄には付たれば、きつう此つた、餘り美しさに、てんぼと思ふて其夜一つ買て、抱て寝たれば、外で見たとは違ふて、其かはゆさがどうもならぬ、太夫がいふには、縁でかなござらふ、多くの人にあひますれ共、こなた程いとしい人はない、必ず女房に持て下されといふた、それからかはゆふ成て、國へ戻る事も忘れ、國には云合付の女房があれ共、それは持ぬ、そちと夫婦に成るぞといふて、何もかも皆其太夫に打こんで此のなりじや、其女郎の

●てんぼ 放縦拘らざるをてんぼ  
うの皮などいふ。てんぼといへば  
即ちまゝといふに同じ。

(45)

名は何といふぞ、それは起請に書て有はい、お前とは女夫にて御座候、外に男を持申候はゞ、酒の糟の地獄へ落入申へく候、民彌様参る、道芝と書て、血判が有はい、勝姫聞はつと思ひ、そなたの名が民彌か、おゝ民彌じや、腰元共申すは、民彌様と申は隠れのな  
いお名じやによつて、聞覺へて云物でござんせふ、勝姫聞き、合點のいかぬ事じや、女の男を持には念を入ふ物じやと、座敷の縁へ上り奥を詠め、不審をなし給ふ、民彌は姫を見失ひ、太夫はどこへ行た、座敷の連子に取付、是太夫、遣手がこぬまに、ちよつと格子へ出やれ、あひにきた、そち故國へも歸らぬに、太夫は心底が變つたか、なぜ出ぬぞといへば、姫やがて連

●ひんとせ

ひんは馬の嘶きなど

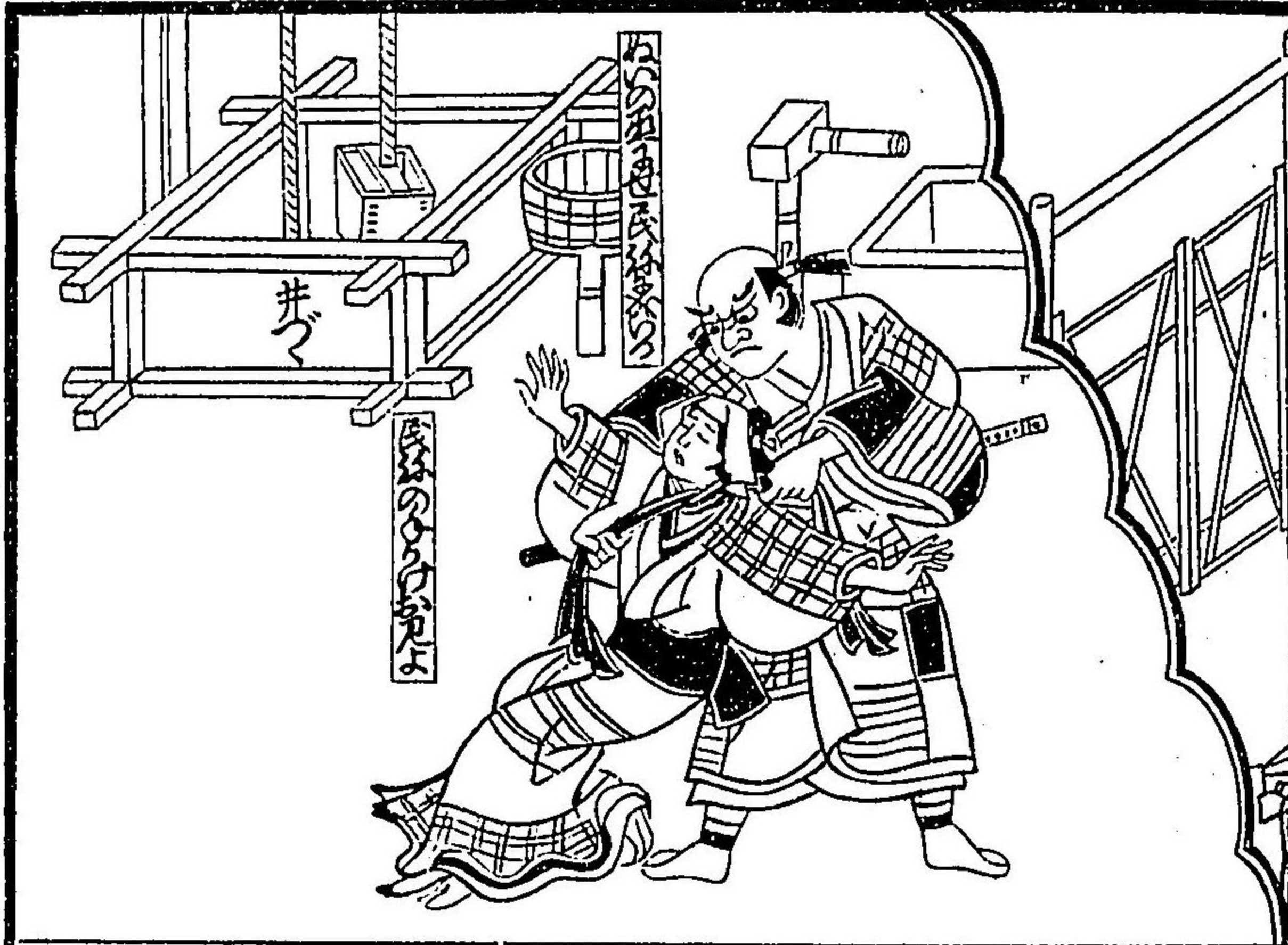
子へ出、手を出しようござんした、お前は國に云名付の奥様が有げなに、國へお歸りなされたがよいとあれは、それは太夫には聞へぬ云分じや、云名付が有ても、其女は何共思はぬ、そち除て女房は持ぬぞ、必變てたもるなど、手を取涙を流し、是程困窮して居るに、國からなせ人をおこさぬぞ、やい亭主、太夫身請に五十ばいの花じや、なぜ廻らぬ、まだ金やらぬ故まはらぬな、そりや國から人が登つた、おせく、狭箱、すつくく、鎗持、大勢迎ひに來たは、小判一萬兩およよいきみく、さあ太夫を身請じや、一人も残らず出よ、見事な事じや、我は誰じや、何太夫様に三味線を教へたよも市じや、三味線教へたらば、我にも一兩ひんと

にや、顔頭をはずむ亦をひんとせなど席にていふなるべし。以下にやんとせ等皆同じ。

せよ、猫は何じや、太夫様の三味線の革に成ます猫じや、そんなら我にも一兩にやんとせよ、鼠は何しに出た、太夫様の櫛をかぶつた鼠じや、そんならそちにも一兩ちうとせよ、揚屋にはつとせい、遣手にやつとせい、殿様お馬、つちのこは鎗持、ようやり持たはいくくと、傾城はなしの獨言云ひ酔臥ける、勝姫は替へらるゝ物ならば、奥にござる民彌様と、あの糟買の男と替へてほしい、抱て寝たい男じやとの給ふを、偽民彌立聞しつと出、是勝姫、そちはあの糟買と寝たいと云ふ、寝させてやらふ、やい糟買め、あれへ行き寝よと引起せば、扱は床入か、心得た、太夫おじや、姫ははておりよ、心得た、あて寝をれよ、合點じやと、

(39)

壬生大念佛



(38)

壬生大念佛



三九



三八



二ノ繪挿佛念大生壬

下りたり上つたりし、遂に障子の内へ入寝入れば、僞民彌は是勝姫、そちはおれは戀も情も知らぬ者じやと云ふが、成程情をよう知てる、身が都の鳴原で、道芝と深ふ馴染め、互に變るな變るまい、そちならでは女房に持ぬと云ひかはしたれ共、そなたは云名付計りで、見もせぬおれが事を明暮戀しう思ひ、男も持はず待て居ると有る、それを聞き、一目もあはぬ某に心中を立給ふ心ざしを思ひやり淺ましいなりをも厭はず、此所へ來りたは、情を知らたでないか、傾城とは口舌をしたり、様々戯れをいへ共、そなたは大名の娘なれば、さやうな事は嫌ふであらふと思ひ、わざと嗜んで身を堅ふ持て居るに、それに糟買は好た男じやとは、おれ

を嫌ふか、そりやなきけな聞えぬぞと様々いへ共、勝姫は返答せず、後をむけ、不思議さふな顔つきして居れば、是勝姫おれには聲のかれる程物をいはせて、一言の返答もせず、何した事じや、よい／＼兎角糟買と寝たいそふな、ゐて抱れて寝よ、寝さして置いて四つにする、何をつかもない、おまへと云ふ男を持てゐて寝てよい物か、是非寝よなら寝まするぞや、寝かねる女じやない、それでも身を疑しう思ふさふな、はてそりやこなたが、僞ものか僞でないか、胸に覺えの有事じや、おかしい事計り、腰元共こいと、振切皆奥へ入給ふ、只一人あとに残り、扱々氣味の悪い、どこぞあらはるゝ所が有かじや迄、えしれぬ酒の酔めがうせた

故じやと、氣味悪がる所へ、おみよ尋ね來り頼みませふといへば、ひむろ立出どなたでござんす、私はお姫様のお爲に成る事を申し參つた者でござんす、直に御目にかゝりたふござります、其由を申上ませふと奥へ入、偽民彌氣味悪く、そなたはどこから來たぞ、私は備後の者でござります、お前はどなたでござんす、身は勝姫をもち育てた、めのとでござる、然らばこな様に申てよい事じや、此所へ民彌様じやと云ふて、來て居る奴は、そいつは偽ものでござんす、それが知れた故、新太郎様や彦六殿、其外大かく左門右門と云ふ衆が連立て、今宵そいつを殺しにござる、それで私は先へお姫様に知らせに參りましたと云ふ所へ、ひむろ出

帝

で其由を奥へ申ましたれば、名を尋ねてこい、其上で御目にかゝらふと申されます、私はおみよと申まして、民彌様のお手かけてござんすといへば、ひむろはよう民彌様、お手かけ様がござんして嬉しうござんすかと、側へ突きやり奥へ入る、おみよは先お姫様に御目にかゝらふと、奥へ入らんとすればおしとめ、扱はそちは民彌が手かけか、内々話して聞て居る、そちが來らばおつ返へせと、勝姫様より仰付なれば、逢はす事はならぬ、それでも逢ふと仰しやるもの、兎角お姫様に逢ふての事と、行かんとするをしかと捕へ、三尺手拭にて首をしめ、是非逢ふと云ふと命を取るぞとしめ付けば、あゝ苦しや、扱は勝姫が云ひ付けて殺さするな、

怨の一念いづくへゆかふぞと罵るを、しめ付くつひにしめ殺すこそ胴慾なれ、扱からだを井の内へ投入るゝと、家鳴しきりにすれば、恐れてかしこへ逃入ける、民彌此音に目覺しつゝと出で、是はしたり、扱も結構な屋敷へ来た、扱は例の大酒に酔ひ此所へ来たを、下々ならば叩き出さふに、上々はやさしい、酔の醒る迄寢さして置給ふた、今の家鳴は凄まじい、兎角歸らふと荷をかたげる所へ、勝姫走り出でなふ、歸しませぬと取付き給へば、化物と心得、おまへのすみか共存ませいで参りました、御ゆるしなされと恐がれば、はおまへは民彌様じや、私は云名付の勝姫でござんすと取付き給へば、扱は酔の内に入りましたか、此口めがいほ

●耳より

いでも大事な事をと、口を振り後悔し、扱々面目なや、私事は道芝といひかはし、外に女房は持まいと起請を書いたれば、そなたに添ふ事はならぬが、おれを今迄待て、外の男には添はずにござつたか、成程男は持ませぬと、おし隠し申さるれば、名譽な最前酔た内に、そなたの男は有やうに覺えたが、夢で有たかじや迄、たとへ男を持ぬと有ても、何うでも添ふ事はならぬ、持たらば有やうにいふたがよい、いや〜持はしませぬ、夫婦に成て下さんせ、何程に仰しやつてもならぬ、そんなら夫婦には成まい、只一夜あふて下されなば、其道芝殿を請出して進ませせふ、是は耳よりな、太夫を請て下さるゝなら、一夜はどう成り共、たとへ



誓言の罰が當らふ共、道芝が爲なれば、心に随ひませ  
 ふが、金の五百兩も入る事じやが、あふた後でならぬ  
 と有てはつまらぬ、手付に百兩程請取らふ、はて其に  
 違ひはござんせぬ、ほんに誠かや、小判にしかけは取  
 ませぬぞや、勝姫はさあ斯ふ云て下さんせ、やい女房  
 共、そちは今迄男持ずに、よう待て居た可愛者じやと  
 云ふて、抱て下さんせ、そんならさふいひますぞと、  
 望の如くいひ抱付けば、さあ寝て下さんせ、そんなら  
 奥へ行ふ、いやこゝがよいと障子の内へ入る、打かけ  
 脱で打敷き、その上へあがり、さあこゝへござんせ、  
 そんなら寝るじや迄、足に泥が付て有、洗ふて來ませ  
 ふと、井戸の水汲上れば、火焰なれ共民彌の目には水

と見え、盥へ汲入足をつけ、なふ熱や此水は火じやと  
 いへば、勝姫手を付け、なふ熱やく不思議な事じや  
 と云ふ所へ、おみよが死靈、盥の内よりすつくりと現  
 れ出れば、民彌見て、やいそちは國本に残し置た、手  
 かけのみよでないか、なふ殿様か懐しや、お前の名を  
 かつて此所へ偽ものが來て居ると聞きました故、是へ來  
 て見ればさふではなふて、誠の民彌様じやよな、是勝  
 姫うらめしい、おれが殿様にあはふと云ふを嫉み、情  
 なくも、ようもおれを殺させた、此怨の一念いつくへ  
 ゆかふぞ、そちを殿様と添する事はならぬぞ、是は覺  
 えなない事を迷惑なと恐れ給へば、民彌は扱はそちは死  
 んだか、姫は左様な心底な者ではない、悪人共がしわ

●悪いぞや「心ぞはかなさよ」  
こゝまでが小唄の文句。

さであらふ、可愛やく恨をはらせよ、いやく一所  
じや殿様も悪いく、小唄悪いぞや、またいとしさに腹  
立や、かねて夜毎にかはる物とは、誰がいひそめし黒  
髪の、もつれて解ぬはの嫉ましや、殿は秋野のますほ  
の薄、よそへ靡くが悪ござる、いふにも餘る言の葉の、  
うら吹風の便りさへ、なき玉むすぶみとても、くる  
よ夜毎に寝られねば、袖になくくくくなんく  
涙にうき年月をへ、此年月をへ、心の水もわき出、か  
へつて熱や苦しや堪がたや、胸の火の川水の川、恨の  
焰情の雫、空には烟大地は波の、ちりくく、男ひ  
とりを二筋の我よ人よと争ひし、女心ぞはかなさよ、  
おみよが死霊は様々苦しめる、所へ偽民彌鎗提げ遁さ

ぬと突かくるを、死霊立塞れば、民彌勝姫は奥へ逃入  
り給ふ、おのれは最前の手かけめでないか、殺したが  
不思議やと、突かくる鎗をおつ取り、そちはうらめし  
い、ようもおれを殺したな、早くも廻る因果の苦み、  
思ひしれとさんくにしめ付け苦めれば、やうくと  
振ほどき、大手を擴げひつ掴み指上れば、逆に肩に立  
を、どうとなげ、小袖に引包み押伏せ、侍共を呼出し、  
たしかに殺し、死骸を井戸へ打入れ置た女めが是へ現  
れた故、取ておさへたと、衣おつ取れば形なし、是は  
不思議やと云ふ所へ、大藏駈來り是々縫殿、こなたと  
だんく仕組だ手だてが顯れ、新太郎彦六が、こなた  
を討に此所へ来るゆへ、先へ駈付け参つた、よいく

民彌めが糟買の體となり、此所へ來り奥に居る、先こ  
 いつから殺さふといふ所へ、民彌は勝姫諸共障子をあ  
 け、奥にて姫が話を聞けば、身が名を名乗て、民彌と  
 云ふて是へはいり居ると有る、何やつじやと思へばお  
 のれじやよな、あいつは大藏が兄縫之丞といふ奴じや、  
 幼少の時分より悪黨ゆへ、大殿勘當なされ國を追拂ひ  
 給ひしが、扱は姉の繼母と心を合せ、悪心をたくみ、  
 身といつはつて是へ來たよな、偽者め遁さぬと、切合  
 ひ給へ共、大勢なれば及ばず、姫を圍ひ奥へ入り給ふ  
 を、それ遁すなと皆奥へ追かけ入る、しかる所へ新太  
 郎彦六駈付奥へ入るを、侍共障子越しに彦六が眉間へ  
 切つくる、南無三寶と抜き合せ闘ふ、新太郎は奥へ切

くも手ひく繩

入り、民彌姫君を連立出れば、彦六見て悪人共は何と  
 した、されば兩人ながら壁を越へ逃げた、討漏して無  
 念な、家中残らず悪人へ一味したぞ、彦六聞きよいよ  
 い逃ば逃せ、重て討つ時節があらふ、民彌は彦六が手  
 を負ふた、あれ討すなどの給へば、いやく身は一尺  
 や二尺切れたふんでも、首さへ胴に附てあれば死はい  
 たさぬぞ、こりや新太郎後は身が請取た、かまはずと  
 皆御供申して立退け、しからは後はそちにまかすぞと、  
 新太郎は人々を連立退ば、彦六は心易しと、大太刀振  
 て、大勢を捲り立く、くも手かく繩十文字、切立  
 く侍共が首切飛ばし、残りし奴原おつはらひ、心靜  
 に立退しは、天晴武士の鑑也

(52)

# 出世景清

## 解題

『出世景清』は竹本座における近松新作の始なり。そも／＼義太夫が大阪道頓堀に芝屋を興行せしは、貞享二丑年二月にて、其時の淨瑠璃は宇治の古物『世継會我』を語り、それより二三回いづれも古淨瑠璃のみなりしが、翌三年二月に至り、『出世景清』の新作出で、これより専ら近松の新作を語るゝなれり。蓋し義太夫は、井上播磨掾の高弟清水理兵衛について修業し、清水理太夫と名乗り、道頓堀虎屋源太夫に出勤せしが、初陣にて、其の後京都に赴き、當時日の出の勢ある宇治加賀掾の部下に加はり、加賀掾のツキを語り、『西行物語』の二段目、藤澤入道夜盗の修羅を語り、あつばれ加賀掾を驚歎せしめ、大評判を取りしが、縁となり、義太夫の爲に力を盡さんとするもの出で來にけり。即ち彼れが京都を去つて、安藝の宮島興行に赴き、やがて歸りて道頓堀に櫓を揚げ、大西芝居を設立したる、其の脊後には、竹屋庄兵衛とて、

(53)

とは加賀掾の銀主たりし者の糸影を引きしなり。ひとり銀主を得たるのみならず、此の時新作淨瑠璃の大才近松門左衛門とも結托する所あるもの、如く爾來近松の新作は續々として竹本座に上場せらるゝことなれり。其の外題については、饗庭氏「巢林子撰註」に曰く、

その外題に出世と置きしも一座を取立一派をはじめしを祝ぎしなり、またこれが趣向を景清とせしも大に心ありての事なり、淨るりはもと平家より出づ、臥雲日伴録に平家物語の作者を景清と平大納言時忠の二人とし合戦のことは悪七兵衛景清記し和歌文官の事は時忠これをしるすといふ事あり、又性佛といふ者平家物語に節づけしてうたひしが其弟子に覺一あり覺一の弟子に四檢校ありて通一靈一景一清一といふと此事參考源平盛衰記の凡例中にも引かれたり、を以て淨るりの祖たる平家物語に縁ある景清を取り出して主人公とせしなり、また此外題の讀み方しゆつせけいせいと讀むべしとの説あり、そは慶長元和年代に行はれし傾城歌舞伎といふもの後に御停止となりて若衆歌舞伎野郎歌舞伎となりて芝居三都に盛りなれど傾城歌舞伎女舞のもとを棄すして芝居狂言

の名題けいせい何々と置くを吉例とすること俗習あるを幸ひ暗に景一清一を利かせかく讀せしなりといふ。

義太夫の爲に出世を祝ぎたるのみならず、作者門左衛門自身にも、此作は實に出世の首途なりき。

さて此の作に景清を尾張熱田大宮司の掣としたるについては、其の出所詳ならず。謠曲景清に、一年尾張熱田の遊女に相馴れしをいへるより、これと源義朝が熱田大宮司藤原季範の娘と契り右大將頼朝をもうけし事とを附會して、景清が事に作りなしたるものかとも思はるれども、もとより確とは知りがたし。但し尾張熱田には景清の屋敷跡と稱する所あり。又同所宇大瀬古といふ所には景清社あり。

【尾張名所圖會】には、此の景清社について、  
平家の勇士悪七兵衛尉景清大宮司の掣なりし故、主家没落の後身をやつし熱田に潜居せし故所々に其舊跡あり、と木下實聞がかきし厚賢帥附録に見え、中略、東鑑源平盛衰記平家物語等の實録に景清熱田に在し事は見えねど頼朝公大敵の餘黨を見脱しにして置かれしはともに大宮司の縁者たりし故なるべし、長門本

平家物語に景清建久六年頼朝公に降参して鎌倉の八田知家が宅にありしが翌年三月七日死去せしよしにするせり。

といへり。古浄るり中或は景清を大宮司の掣としたる作前にあるやも知れずたとへ寶録には記する所なきも巷説俗談などを材源とせしやも未だ知るべからず所詮斯の如き事實を深くあなぐりもとむるにも及ぶまじ。

浄るり以前景清が事を作りたるものは、謠曲に「景清」大佛供養等あれど此の浄るりはおもに舞曲の「景清」に據りしものなる事は序論中甕庭氏の説にあるが如し。而して舞曲にある遊女あこわうを此の作にて阿古屋となしひたすら利慾に迷へる輕薄女をして情義ある女性に作り改めて換骨脱胎の妙を盡したる事については、篁村翁其の著「雀籠」中に詳説せられたればこゝにはいはす。「兜軍記」阿古屋の翠寶は世人の洽く知る所なるが此の作の翻案といふとは知るもの少し。

扱も其後、これを浄瑠璃の序といふ。古浄瑠璃には慣例として書出しには必ず「扱も其後」或は「去程に扱も其後」などあり、段切には「何々と申すばかりはなかりけり」などあり。段切の詞は暫く措き、書出しに「扱も其後」など接連詞を附すること其の例なきに似たれども、こゝは古き正本の詞を襲用せらるものにて、昔は浄瑠璃を語るにも、其の爲に新作することもなく「平家物語」又は「義経記」等古物語の一節を探り、文詞を修むることもなく、其の儘語れるより、接連詞を冒頭に冠ちて差し異むることなかりしが習慣となり、新作の時代となりても、浄瑠璃には「扱も其後」の書出しなくしてはなはやくに心得申頃まで、此の遺風を存したるものにて、近松の若書きにも往々此の序を附したるあり。島山

### 出世景清

近松門左衛門作

扱も其後、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五は、大乘八軸の骨髓、信心の行者大慈大悲の光明にあづかり奉つる、觀音智力ぞ有がたき、こゝに平家の一族悪七兵衛景清は、西國四國の戦ひに討死すべきもの成しが、死は輕くして易し生は重くして難し、所詮命を全くして平氏の怨敵、右大將頼朝を一太刀恨み、平家の耻辱をすゝがんと、落人となり尾張の國熱田の大宮司に、聊か知音有ければ、深く忍びて居たりけり、

箕山は此の序といふもの、文格をなまざるを異し、丹後後尊太夫出羽播磨等の太夫に其の理由を質したるも答ふるものなく、唯習慣として太夫側にては、序の詞を誦るに、流派によりて曲節を異にし、其の語り様には一子一弟相傳の口訣ありて、重視せられたることを、「世道大鑑」に記せり。

●妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五 妙法蓮華經は法華の題目、普門品第二十五は觀世音菩薩の普門の書出しに於ける文字なり。普門とは觀世音菩薩十方國土にさまじくの形を普く顯し一切衆生の諸を引いて大衆八種の骨體と賞賛したるなり。

●惡七兵衛景清 景清は平清盛の次子にて平家宗の侍大將なり。平家没落の後、播磨島下の伯父大日坊に身を寄せしが、伯父に異心あるを疑ひて之を殺したるより、人呼んで惡七兵衛といふ。凡て此の頃伯父を殺したるものは、名の上に惡といふ字を附けて呼ぶ風習あり、宇治の惡左府、惡源太義平などみなしかり。

●四國四國の戰 八島壇の浦等の合戰をいふ。

●熱田大宮司 「尾張名所圖會」に曰く「寛平緣起に朱鳥元年以來始置社守七員……其一人爲長とある是は大宮司の權輿なり」と尾張氏にして天火明命の裔孫の藤原氏に改め千秋を氏とす……建和種命の子尾張宿禰命大宮司兼大禰宜に補せしより神孫連綿として百十九代の今に至れり云々。

もとより大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり一人娘におのゝ姫と聞えしを景清に娶せ、子とも智ともかしづき給ふ、心ざしこそわりなけれ、景清大宮司の御前に出、誠に某無二の御懇志にあづかりながく在居仕り、身は埋木と朽果ん末頼みなき身ながらも、せめて頼朝を一太刀窺ひ君父の恨をさんじ、其後は腹切て兎も角も罷ならんと空しき月日を送り候、然

●風流 何に限らず極めて勝れたる。

●鎌倉殿 右大將頼朝を指す。

●南都東大寺 南都は奈良の異稱なり、京都より南に當る處都なれば南都といふ。東大寺は聖武天皇の御願により、天平十三年建立、金剛の盧舍那佛を安置す、身長十六丈、世に奈良の大佛と稱するもの是なり。

●大佛殿の再興 第一の再興は文徳天皇の齋衛年中あり、第二は高倉院の御宇治承四年十二月廿八日平重衡の兵火に罹りしに依り、醍醐院榮坊重源上人勸進して治承五年三月三日大佛殿事始をなし數年の後竣功せり。こゝにいふ再興は即ち此の時の事にして、源頼朝は元暦六年に米一萬石、金一千兩上相一千匹を寄進し、建久六年三月十一日東大寺供養の爲めに上洛して、更に馬千匹、米一萬石、黄金一千兩、上相一千匹を寄進せり。此の時頼朝は政子頼家をも伴へりといふ。

●神變不思議 神の通力などの測り知るべからざるをいふ。

●四相 我相、人相、衆生相、壽者相これを四相といふ。「本朝俚

る所に今朝屈竟の事を聞出し候、其故は鎌倉殿は南都東大寺の大佛殿を御再興有るべしとて、秩父の重忠彼の奉行を承はり、昨日の暮程に此所を打て通り候よし、たとへば頼朝七重八重の城廓に取籠り、天地に鍊の網を張て用心嚴く候とも、此の景清が一念にてなどか狙はで候べき、地さりながら重忠つねに頼朝の傍を離れず、神變不思議をかねたれば、其身は都にありながら心はなほ鎌倉殿の傍に在り、調斯う申す景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る、頼朝に出合ひ既に討たんとせしこと三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられついに本望遂げ申さず、然れば先重忠をさへ討とらば、頼朝を討んこと踵を廻らすべからず、重忠此

迷に曰く、金剛經云、衆生佛性無  
有、異、緣、有、四相、不、入、無、餘  
涅槃、有、四相、則、是、衆生、無、四相、  
則、是、佛、迷、則、佛、是、衆生、悟、則、衆生、  
佛、世、俗、四相、を、悟、る、な、ど、い、ふ、は、  
な、り、と、但、し、こ、は、重、忠、が、賢、明、な  
る、こ、と、を、譬、へ、た、る、詞、の、か、。

● 龍を纏す 龍またかじともい  
ふ。龍を纏すとは其方向を替るま  
でにて極めて速なる義に用ゆ。

● ござんなれ こそ、ある、なれ  
の約中世の詞なり。

● 北の方 公卿武家など身分ある  
人の妻女の尊稱、女は陰なれば北  
といふと。

● 瘧丸 小鶏と共に平家重代の名  
刀。

● 獅子の勢ひ龍のせい 獅子奮迅  
の勢、又は龍虎の闘など威勢の猛  
々しき形容。

● 文治五年 「靈註」東大寺再建は  
文治四年にして五年は頼朝奥州征  
伐なりいか一年あやまりけん。

たび東大寺の奉行に上ること幸ひかな仕合かな、天の  
時來りたり、忍びやかに南都に下り、重忠が首引提て  
參らんにはやお暇と申さるゝ、地太宮司聞給ひ、實に  
屈竟の時節ござんなれ、かまへて人に悟られ給ふな、  
急いで事を仕損ずな、片時も早くと有ければ、北の方  
も悦びて宗盛公よりたび給ふ、瘧丸といふ名劍を景清  
に給はり、首尾よく仕果せ給ひなば一日も滞留なく早  
くおかへりませと門出の盃出さるれば、互ひに干  
秋萬歳と、獅子の勢ひ龍のせい、勇みくへ行く虎の  
尾張の國を立出て、奈良の都へ 三重 上らるゝ  
フシいで其頃は文治五年春過ぎて、夏來にけらし白旗  
の、源氏の大將頼朝は南都東大寺大佛再興の御願にて、

● 春過ぎて夏來にけらし白旗 持  
統天皇の御製、春過ぎて夏きけ  
らし白妙の衣ほすてふ天のかく  
山。白妙を白旗ともぢり源氏の太  
將と喚起したるなり。

● 松にも花 藤の花の松にからま  
りて花の咲けるをいふ。春日は木  
藤の名所にして、かれて藤氏の祖  
神を祀れる神なり。

● 飛ぶ火の野邊 東大寺の前に北  
向の苑神といふ社あり、其所を  
飛火野といふ。

● 大和大工飛彈工 大和は古き帝  
都にして廣大たる建築多ければ、  
昔は大和の大工を勝れたるものと  
したり、又飛彈工はこれ飛彈の  
大工の事なりといへれど、番匠と  
書いてひだのたぐみと讀ませる證  
あれば、これは飛彈園の大工にあ  
らずといふ説もあり、つまりこゝ  
には大工の勝れたるを、俗説によ  
りて列れたるのみ。

● むらごう 「靈註」むらごうは  
村邊にてむら／＼に渡り染方とい  
ふ。

● 柳櫻をこきまぜて 「見渡せば柳  
櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なり  
けり」。此の歌を取りしなり。

畠山の重忠奉行職を承り、松にも花を春日野や、飛火  
の野邊に假屋をうたせ、横目帳付勘定方、大和大工に  
飛彈工、杣人木造り事終り、今日吉日の柱立、我身は  
棧敷に一だん高く、むらごうの大幕うたせ、つゞいて  
見えしは本田の次郎、其外の侍共、帳場々々にしるし  
を立、弓鎗長刀吹貫に、柳櫻をこきまぜて、花やか  
成ける御普請なり、斯くて番匠の棟梁、木工の頭  
修理の頭、おのがしななる出立、吉方に打むかひ、先  
づやがための祭文を唱へつゝ、御幣を振て再拜し、手  
斧始の其の儀式、嚴重にこそ勤めけれ、むへもとみけ  
りさきくさのみつば四葉の大伽藍、手斧始のことぶき  
に、千代を固めて柱立、春は東に立そむる、これ萬物





(載所合歌盡人職)匠番

●番匠の棟梁 番匠は前いふ如く大工にして棟梁は今いふ棟梁と同じ。  
●木工の頭 朝廷における大工棟梁の官名。  
●修理頭 これも朝廷に仕へ宮城の破損したる時など修理を司る役人の長なり

の始なり、夏は南にめぐる日の菖蒲が軒や薫るらん、秋はまた西の空、つきせぬ契りかたどりて天の河原に橋ばしらしらげたつるやつき鉋、雲をそなたにやり鉋、冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ、めぐれやまはれ井戸車、かまど賑はふ竈殿、先陰陽の二柱、二本の柱は女神男神を表したり、三本の柱は三世の諸佛、四本の柱に四天王、四海泰平民安全と祝ひこめたる墨壺の、いと直なる國なれば、寶や宿に三目錐、鋸屑のかずくと、濱の眞砂と君が代は數へ盡さじ、面白や、然るに此の大伽藍と申すは、聖武皇帝

●おのがしなゝる出立 しなは品にて各自の階級によりて服裝の異なるをいふ。  
●吉方 方角の吉き方。  
●むべしとみなり (要註)古歌に「このとはむべしとみけり咲草の、三つは四つはに股作りして」  
●伽藍 衆多の僧の遊歩修進する場所をいふ。精舎の義。  
●春は東 春は東門より來るといふ、夏は南、秋は西、冬は北と四季と四方とを配したるなり。  
●つきせぬ契り 四の空といひしより月にかけつきせぬ契りと四方極樂浄土をきかせたり。  
●しらけたつるや しらけるは精にて米を搗いて白くするをいふ。それよりつくとかけて突鉋といへり。突鉋は又廣兩端に柄あり、押して使ふもの、桶工などの用ゆる道具なり。又雲をあなたにやるといふより鉋鉋といへるも、皆意義あるにあらず。例の筆拍子なり。  
●冬は北にて云々 これは金神の居場所によりての文作なるべし。金神は春は龍、夏は庭、秋は雲、冬は井に在りといふ。

の御建立、三國無雙の靈場なり、兜卒天の内院を、さもありくとうつさるゝ、堂の高さが二十丈、佛の御丈は十六丈、雲につゞけばおのづから、月を後光と三笠山、柱の數は天台の、一念三千の機をあらはして、三千本と定まれり、軒の楹は法華經の文字の數、六萬九千三百八十四本なり、山門には獅子の狛、偕正面より四方四面の、扉々の彫物には、松にから竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を争ひ、百千萬の獸を、ほつたてくくるりくるりと巖に追上げ追下し、風に嘯く波間より、紫雲をまいて上り龍また下り龍、玉を擲んで虚空に捧げ、鱗を立たる其勢ひ、手を盡させて彫つくし、偕棟瓦軒瓦、金銀瑠璃玻梨硨磲瑪瑙、珊瑚琥珀水

(64)

- 陰陽の二柱 伊弉諾、伊弉册の二尊をいふ。神を一體二體といふに一柱二柱といへば、二本の柱にきりせたるなり。
- 三世の諸佛 \*
- 四天王 東方は持國天、南方は增長天、西方は廣目天、北方は多聞天なり。
- 漢の眞砂 數多きことの形容。
- 三國無双の顯揚 日本はいふまでもなし、支那天竺にも双ぶものなし。
- 兜率天 佛説にいふ欲界六天の第四にして、四空居天の一なり。地上三十二萬由旬の空中にあり。
- 月を後光 (靈註)佛の後光には輪後光舟後光などあり、これは月のまるきを其儘に後光と見たてしなり。
- 天台 天台宗のよにて、法華經を宗基とす。天台のといふは其の教義をいふ。
- 一念三千 吾人の一念中には三千の法界を具すとの意。
- 山門 寺院の前にある樓門をいふ。
- 獅子の狛 狛犬は始め高麗國より渡れる獸にて狼に似たり、故にこま犬の稱あり。又獅子の形をなしたるもあり、獅子の狛は即ち是なり。

晶をふきたてく、珊瑚樹の椈をひつしと打たる臺には、金襴錦に柱を包んで、黄金の鋸を輝かせん、棟木を負の柱をして、南畝の農夫よりもおほく、梁に架するの椽は機上の工女よりも多く、釘頭の磷々たるは、度に在るの粟粒よりも多く、日暮の説法讀誦の聲、しぐんのげんぎよよりもおほからしむ、佛法繁昌四海鎮護の大伽藍、如意満足の柱立、目出度しく、目出度しとて、手斧をつ取りてうくく、槌おつ取てはしつていてい、鉋取のへさらくく、ゑいさらくくくくちやうくくくと、打はじめ取はじめ、三々九度の御酒を捧げ、千度百度、祈念して重忠に色代し棟梁座をぞ下りける、手斧始も事過れば、數千の番匠

(65)

- 相 椽に連なる木又は垂木の端にあるもの。
- むな木を負ふの柱云々 「阿房宮賦」の使、負棟之柱多於南畝之農夫、架梁之椽多於機上之工女、釘頭磷々多於在瘦之粟粒云々」を取りしなり。
- 如意満足 思ふ通り完全無缺なるをいふ。
- 色代 人に對して贈するもにて會釋といふが如し。
- 發願 かねい乾飯のとなれどし、轉じて辨當のこに用ゆ。
- 執權 もと政事の權を執る事なれども、多くは今いふ執事のこに用ゆ。
- はれいのには (靈註)晴の場といふとならん。
- ぞんざい 粗忽の義。

下々まで、みなく小屋にぞ 三重入にける、フン遙のあとより、地四十ばかりの男なるが人足とおぼしくて、晝餉の櫃を荷ひ、頬被りして通りける、厨秩父の執權本田の次郎きつと見て、ヤアこれなる下郎めは、かゝるはれいのはなるに頬被りは緩怠なり、色代せよと咎むれば、彼男小聲に、作法も知らぬ下々なれば御免と云てつと通る、どこへく、さてくぞんざい千萬なる奴めかな、頬被りを取らずんば誰かある、それぶてたけと下知すれば、中間ども承はり、一度にはらりと取まはす、番匠の棟梁このよしを見るよりも、ヤア是れ本田殿、彼奴は其日雇ひの人足にて、差別も知らぬ下郎なれば、さぞ推參も候へし去ながら、

●かたなして 「(要註)横着をして  
なり、狂言「あやりの」の文句に、  
「またれいのかたなを申すものでこ  
ざる」とあり、これ横着なる太郎冠  
者か替めて主人のそしる詞なり。

斯るめでたき折なれば、たゞ何事も穩便に計ひ給へと  
申しける、本田聞も入れず、いやさ、彼めはちと人に  
似たるものゝ候といへば、儲珍らしや本田殿、人が人  
に似たるとは事新しく候、いかに下郎め、おのれ大分  
の錢を取ながらかたをして働かず、横着ひろく故にこ  
そ人々にも怪しまれ、祝義に邪魔をなしけるよ、價を  
損にする迄ぞ、罷販れと叱りければ、地よき幸ひと景  
清は、荷ひし櫃を下し置き、迷惑そうに揉手をして、  
表にこそは出らるれ、重忠幕の内より御覽じて、し  
ばらくく、調いかに方々、平家の落人此處彼處に忍  
みて、君を狙ふと聞けるが、只今の人足は、まさしく悪  
七兵衛と見しは僻目か、あれあますな、云ふても是は

●朝夕に迫り 朝夕の生計に迫れ  
るなり。

●俯に立つ 景清の事のみか思ひ  
なれど、幻に誰を見ても景清に見  
ゆるなふ。

一大事の柱立の清めの庭、けがらしてはいかゞなり、  
前なる野邊に追出し打て棄よとの給へば、元よりはや  
る關東武者、我もくと駈向ふ、景清これを見て、荷  
棒に仕込たる、件の痣丸するりと抜いてさし翳し、地  
大勢を左手にうけ、あたまたゝいてからくくと笑ひ、  
コレお侍、調某は尾羽をからせし鎌倉の浪人者にて候  
が、朝夕に迫りかゝる佗しき營みを仕る、さすが人目  
の恥かしく顔をかくして有ければ、なんぞや某を悪七  
兵衛とは、眼が眩みて有けるか、但しは其景清が怖ろ  
しさに俯に立けるか、よし何にもせよ是程まで雑言せ  
られ、堪忍罷ならず、景清ほどこそあらずとも、地そ  
つと手なみを見せんずと、れいの痣丸小脇に搔い込み、

(68)

●番匠箱

大工の道具箱のこと。

●手裏劍 手裏に執りて敵に投げ付るに用ふる刀、但しこは鑿ややり鉋を手當り次第に手裏劍代りに用ひたるなり。

多勢が中に割て入り、火水になれとぞ 三重切合ける、時刻もうつらぬ 地其中に、十四五人切ふせ、重忠に見參せんと、こゝの詰りかしこの隈に駈け入りく騒げども、大勢に隔てられ、今ははや是迄なり、深入して雑兵共到手負せられては景清が、末代の名折なり、又こそ時節あるべけれ、いで追拂ふて落行かんと、番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿手斧鋸やり鉋、屈究一の手裏劍と、おつ取りく打立れば、さしもに勇む軍兵共、わつと云ふてはさつと引く、なほも寄せ來る者共を、小家の小柱引ぬいて、八方無隅に 三重ふりまはれば、フン秋の嵐に 地散る紅葉、むらむらばつとぞ逃にける、チ、左もそふつ左もあらん、此度は仕損ずと

●恐れぬものこそなかりけり 古淨瑠璃に有り觸れたる段切れの筒なり、床の扱し其後に對す、或は「皆感ぜぬものこそなかりけれ」などいあり。

●阿古屋 舞の本「景清」にはあこわうとあり、近松これにあこやと改め、「平假名盛衰記」にもこれを題する。「舞註」五條坂の遊女阿古屋は名高きものなりしか六波羅密寺中に阿古屋の墳ありと郡名所圖會に出たり。

(69)

も、此景清が一念の、劍は岩を通さんものと、跳り上り飛上り、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける、悪七兵衛が力業、早業輕業神通業、只飛ぶ鳥の如くなりとて恐れぬものこそなかりけれ。

第二

地去程に誠や猛き武士も、戀に裏るゝ習ひ有り、薪を負へる山人も、立よる花の景清も常に清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら清水坂の片ほとりに、阿古屋といへる遊君に、フンかりそめぶしの假枕、いつしか馴れて今ははや、二人の若をぞまうける、兄のいやいし六歳、弟のいや若四歳にて、世におとなしくぞ

見えにける、阿古屋はもとより遊女なれども、妹脊の情こまやかに、世になき景清をいとおしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家業をつがせんと、習はぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を教ゆる心ざし、たくひ稀にぞ聞えける、フシかゝる所へ悪七兵衛景清は、重忠を討損じ、やうくとして清水や、阿古屋が庵に着給ふ、女房子供を引つれ、こは珍しや何として、御のぼり候ぞ、先此方へと請じける、景清申しけるは、内々御身も知る如く、我平家の御恩を報ぜん爲め、鎌倉殿を狙へども、其甲斐なくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山重忠東大寺再興の

奉行に上るをよきしほと、先重忠を狙はん爲め、我身を賤しき下郎にしなし、既に間近く付寄せしが、運強き重忠にて、我等が智略あらはれ、本意なくも討損じ、一向に重忠と刺違へ死なんどは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まほしく、無念ながらもながらへて、儲只今の仕合なり、調誠に久しく逢はぬ間に子供もいとう成人し、御身もずんど女房をしあげたり、何でも今宵はしつぼりと積る辛さを語らんと、しとと寄せばるゝ、榮耀らしい、斯く浪人のうき身といひ、殊更敵をもつたる身が、せめて一年に一度の便をもし給はず、ヲ、夫もことわりよ、此頃聞ば、大宮司の娘おのゝ姫とやらんに深い事と承はる、

●しやほんに (箋註)シヤ物々し  
シヤ御座んなれなどのシヤを眞の  
上に加へしにて貞享元祿頃流行り  
し言葉、しやほんなど詰て云へり  
長唄などに「しやほんに」など長く  
云ふは後なり。

●戀いさかひ犬が喰ふ 謎に夫婦  
喧嘩犬も喰はぬといふ、此の頃は  
戀いさかひは犬が喰ふといひしと  
見ゆ。

尤かなみづからは子持進のうらふれて、見る目にいや  
と思すれども、子に絆されて御出か、愒氣するではな  
けれども、浮世狂ひも年による、しやほんにおかしい  
迄、フシ能い機嫌ちやと有ければ、調景清打笑ひ、是は  
迷惑、其の大宮司の娘おのゝ姫にはしかく物をも云  
はゞこそ、八幡くさうした事で更になし、地そちな  
らで世の中にいとしいものが有るべきかと、なほもも  
たるゝ袖枕、阿古屋も心打解けて、思ふ餘りの戀いさ  
かひ、犬が喰ふとや是ならん、桃子盃たづさへていや  
石に酌とらせ、三年積し物語、語らひ明し給ひける。  
フシ契りの程こそゆかしけれ、地景清の給ふやう、我  
久しく尾州に蟄居して、観音參詣怠たれり、在京の間

●轟坊 (箋註)轟坊は京都清水寺  
中にあり、また清水觀音境内には  
景清爪形の觀音など云傳へし古跡  
あり。

●くんこう くんこうは勳功にて  
戰功に勳功あるものは賞與あるよ  
り、勳功即ち褒美のことに用ひた  
るなり。  
●制札 昔し罪人を尋ねる時など  
辻々に其の理由を記したる札を立

は一先日參の志し有、去ながら是より毎日往來せば、  
人の咎めもいかゞなり、轟の御坊にて一七夜は通夜申  
し、地やがて歸り對面せんと、編笠取て打かつぎ表を  
さして出給へば、いや石門まで送り出、さらばくの  
小手まねぎ、チクリしほらしかりけるおひさきなり、  
地こゝに阿古屋が一腹の兄いばの十藏廣近は、北野詣  
をしたりしが、大息吐て我家に歸り、調妹の阿古屋を  
傍に招き、是を見よ誠に果報は寝て待てとや、悪七兵  
衛景清を討て成りとも擲めてなりとも參らせたるもの  
ならば、くんこうは望次第との御制札を立られたり、  
我等が榮花の瑞相此時と覺えたり、兵衛はいづくに有  
けるぞ、はや六波羅へ訴へて、地一かど御恩にあづか

て、布告す、其の札をいふ。

●飛ぶ鳥を落す 機勢の強きを形容していふ。「北條五代記」に曰く「長坂長閑跡部道印出頭し其威に甲斐國中飛鳥もおちぬべし云々」古くより用ふる俚語なり。

●そもや そもは接續詞なれども、多くの場合發語なり。こゝはア、どうしてといふやうな意。  
●飛鳥懐中に入る時は云々 飛鳥懐中に入る時は獵師もなほこれを捕へずと同意。此の語は「顔氏家訓」に「窮鳥入懐、仁人所憫」といへるに基けり。人の困窮して來り倚る時は恩怨を棄てもこれを救ふに譬ふ。

●そもやそも こゝもどうしての意。

らん、いかにくとおほせける、阿古屋はしばし返事もせず、涙に暮て居たりしが、なふ兄上そもや御身は本氣にての給ふか、調但しは狂氣し給ふかや、地妾が夫にて候へば、御身の爲には妹尊、此子は甥にて候はずや、平家の御世にて候はゞ、誰か有らう景清と、飛ぶ鳥までも落し身が、今此御世にて候へばこそ、數ならぬ我々を頼みて御入候ものを、たとへば日本に唐を添へて給はるとて、そもや訴人がなるべきか、飛ぶ鳥懐中に入る時は狩人も助くるとよ、きのふ迄も今朝迄も、隔てぬ中をそもやそも、地のかれふ物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽せよと、泣つくどいつ止めける、調十藏からくと打笑ひ、ヤレ

●人は一代名は末代 身は一代名は末代、家は一代名は末代などいふは、いかにいひなせり。こゝは一時の利欲に眼がくらみ、後の世までも譏りを受くる事の悲しきを譬へ諷むるなり。

●女さかしくて牛賣損ふ これも古語。女さし出がましきを戒めたる詞。  
●御分 おん身、又そなたなどいふに同じ。

●いけらん内 生きてあらん内の約。

名を惜みて徳を取ぬは、昔風の侍とて當世ははやらぬ古い事、其上御邊が夫よ妻よなんどとて心中立はしけれど、あの景清はな、大宮司が娘おのゝ姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ、女さかしくて牛賣ぬとは御分が事ぞ、諸事は兄にまかせよと、飛で出ればまた引止め、地いや大宮司の娘は人の云なし悪口ぞや、景清殿に限り左様の事は候まじ、よし人は兎も角も、妾が二世の夫ぞかし、左程に思ひすえ給はゞ、子供も妾も害して後、心の儘になし給へ、やあいけらん内はかなはじと、すがりついてぞ泣給ふ、調然る所へ熱田大宮司よりの飛脚なり、景清様の御旅宿所は是にてや候やらんと、やがて文箱を出しける、

いなせの傾り 普悪につけ何の返事もなきをいふ。

十藏出合ひ、いかにもく是は景清殿の旅宿にて候が、宿願有て兵衛殿は、清水參詣致され候、御文を預かり置歸られ次第見せ申さん、明日御出候へと、飛脚を返し、兄弟文をひらいて見れば、おのゝ姫の文にて有り、かりそめに御上りましうていなせの便もし給はぬはかねく聞し阿古屋といへる遊女に御したしみ候か、未來を掛けし我が契りいかゞ忘れ給ふかところまぐとぞ書れける、阿古屋讀も果給はず、はつとせきたる氣色にて、恨めしや腹立や口惜や妬ましや、戀に隔はなきものを遊女とは何事ぞ、子の有る中こそ誠の妻よ、斯とはしらではかなくも、大切がりいとしがり、心をつくせし悔しさは、人に恨みはなきものを、男畜生い

繪廻 こゝは執着の深きこと。

たづらもの、ア、うらめしや無念やと、文ずんくりに引裂きて、かこち怨みて泣給ふ、フンことわりとこそ聞えけれ、地十藏悦びそれ見たか、此上は片時も早く訴人せん、もはや思ひ切たかと云へば、ヲ、何しに心残るべき、せめて訴人してなりとも、此の恨を晴してたべ、實によき合點と立出れば、又しばらくと引とゞめ、とは云ながらいかに恨があればとて、夫の訴人はなるまいか、地イヤ又思へば腹も立憎いは女め、エ、是非もなやと、或はとゞめ或はすゝめ、身を悶へてぞ歎かるゝ、地十藏袂を振り切て、エ、輪廻したる女かな、そこ退けと突のけて、六波羅さして急ぎしは了簡もなき、三重、次第なり、フシ斯とは知らで、地景清は清



(78)

●直甲 悉く甲冑を帯したる兵をいふ。其の本にては、兄十藏なくあこむうが自ら六波羅に訴へ出、我家へ六波羅勢を導くことになりなれり。

●江間の小四郎 北條義時のこと。

●荒法師 血氣にはやる法師原なり。

●田村將軍 \*

●沙門 桑門又世捨人などいづれも僧のこと。

水寺に參籠し、轟の御坊に通夜申し、同宿達に雙六うたせ、助言してこそあられけれ、頃は卯月十四日夜半計りの照る月に、直甲五百餘騎、江間の小四郎大將にて、訴人の十藏真先に向け、轟の御坊二重三重に取廻し、鬨の聲をぞつくりける、元來こらへぬ荒法師、門外に突立て、そも此寺は田村將軍此方守護不入の靈地なるに、狼藉は何者ぞ、夜盗人なんと覺えたり、あれ打とれ小僧どもと聲々に呼はれば、江間の小四郎駒駈け寄せ、左な云れそ法師達、御坊に咎はなけれども、平家の落人悪七兵衛景清今宵これに籠りし由、いはの十藏訴人によつて、義時討手に向ふたり、異儀に及ばず寺ともいはせじ沙門とも云すまじ、片はし切つ切散

(79)

●常陸の律師 荒法師の領袖なり。  
●慈悲第一 觀世音は大慈大悲といふて慈悲第一の佛なればしさいふ。

らせと、云も敢へぬに悪七兵衛、是に在りと切て出る、常陸の律師觀範此よしを見るよりも、慈悲第一の此寺にて、信心の行者を空しく討たせては、觀音の誓願はいかならん、防げやく法師はら、さよへよや下僧共承り候と、衣の袖をしぼりあげ、地得物くを引提て、三十餘人の荒法師、五百餘騎につまさまへて命を惜まらず、三重一戦ひける、五百餘騎が四方にわかつて隙をあらせず防げども、景清は飛鳥の術を得たれば、左右なく討れんやうもなく、雙方しろみて控へたり、景清掾端に突立て、今宵の訴人は妻の阿古屋同く兄の十藏と覺えたり、おのれ數年の恩愛を振り棄て、大愆にふける愚人ども、勿體なくも此御寺に血をあやす奇怪さ

●三三太 (舞註)十藏が下人ゆゑ五にて三三太なり、忙中の一戯といふべし。

●でつく、ぐし 双六の賽の目にてでつくは重五、ぐしは五四なり。  
●愚人夏の蟲 「本朝舞註」に「愚人は夏の蟲飛んで火に入る如し、大智度論に、愚疑多者如燈蛾赴火、云々」とあり。此の喩を取りたるなり。

よ、迎も世になき某がおのれらが身の爲ならば、何條命惜からん、人多く討たせんより女房兄弟おり合て、搦め取れとぞ喚きける、十藏が下人三三太といふもの分別もなく飛でかゝる、景清莞爾と打笑ひ、傍にありける雙六盤、片手に取て投付ければ、三三太が眞向に響きわたつてはつしとあたれば、首は胴にぞにへ込みける、チ、でつくともせぬでつちめが手柄しさうに見えけれども、ぐしくとなりけるは誠に愚人夏の蟲と戯ふれて立つ所を、十藏つゝいて切てかゝる、景清長刀押取り延べ、蟲同前の木葉武者、娑婆の訴人は是迄ぞ、閻魔の廳にて訴人せよと、うけつながしつ切結ぶ、江間の軍兵是を見て、訴人討すな加はれと、どつとつ

●音羽山 清水寺の在る所を音羽山といふ。

れて押隔つる、心得たりと景清は、さいもんを小楯に取り、入かへく大勢を左右にうけ、眉間眞向鎧のはづれ、嫌はず餘さず 三三 打ちたつる、フシこは叶はじと軍兵共、十藏を引つゝみ、フシ六波羅さしてぞ引にける、地 景清今は是迄と、音羽の山の峯をこへ、梢を踏み分け巖をおこし飛こへ、跳こへ飛越、剎那が間に飛ぶが如くに、東路さして落行しは、誠に稀代の武夫やと、儲感ぜぬものこそなかりけれ

第三

地かくて其後悪七兵衛景清行方知れず成たれば、尤天下の御大事と諸國の由縁を詮議ある、中にも熱田の大

●土も木も云々  
靡々の草木もなきにふ事。

●重忠  
〔要註〕重忠人形にて其座に並び居れば文句にはとほらず、直に詞に人を出す、これ目に見ずるもの、善方なり。

宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎擲め取て、警護厳く打つれさせ六波羅に引すゆる、梶原源太大宮司に對面し、汝は當家の大敵平氏の落人景清を、聲に取のみならず剩へ行方もなく落しける、罪科甚だ輕からず、何方へ落しけるぞ眞直に申せ、少も陳せば拷問せんと、はつたと怒つて申ける、大宮司聞給ひ、仰の如く景清とは縁を結び候へども、去年の春國許を立出、今に便も候はず、土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとして隠し遂られ申すべきか、聲に取りしを曲事として誅せられんは力なく候、行方に於ては存せぬと、詞清しく申さるゝ、重忠仰せけるは尤々、たとへ行方を知つればとて聲の訴人は致されまじ、達ては此方の不

●たつては  
〔要註〕達て詮義するとの界語なるべし。

●新造の牢  
景清を入れる爲めに新に築きたる牢獄なり。

●若紅葉  
暗に子供をさす。

調法、いかに梶原殿、彼の景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲め、己れと名乗て出ん事は目前に見え候、此儀はいかにと有ければ、地おのく評定尤もと、六波羅の北の殿に、新造の牢を建て、大宮司をおしこめさせ厳しく番をぞ、三派せさせける、フシ人につらくは、あたらねど、何の報ひや袖の露、枯れも果なで小野の姫、いたはしや去年の春、夫は都へ去にしより、阿古屋の松の夕時雨、染つけられて若紅葉、こひやちらんとあけくれに、フシナクリ人目つゝみのくひくと、案じ煩ふ身の上に、父は都の六波羅へ、捕となりて淺ましや、憂目にあはせ給ふとの、其おとつれを聞きしより、

●桑名の舟 勢州桑名の城。尾州熱田より七里の波しを越えて京に上る。故に舟といへり。

●みるめ 海草の名、見るにかけたり。

●かつく 海士などが水を漕ると荻藻は藻を蒞り来るをいふ。

思ひに思ひつみ重ね、せめては憂にかはらんと、乳母ばかりを力にて、小チクリ旅の衣手、涙冷たきくれなるに、紅絹裏濡れて夕ざれし、フシ空飛ぶ雁のかへるさに、物忘れせぬ古郷の、風も我身に吹きかへて、今の門出ををはりぞと、國の名残もつゝましく、身の種蒔し産の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩に、あくまはらへと取る弓の、桑名の舟に梶枕、敷寝の筥の荒蕪、肌にあれてつらけれど、戀する海士が鴛鴦の、夜の衾とみるめかや、かつく荻藻は何々ぞ、小チクリ歌によまれしひじき藻や、かだめ甘海苔春も又、若布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見えて、おさな鶯ねをぞ鳴く、花にまがひの櫻のり、天をひたせば雲のりに、月

●鹿尾菜 藻草の一種。

●かだめ いかめのことなるべし。荒布の類。

●あまのり 海苔の一種。

●めざし 童男童女の顔の髪目のなすやうに垂れたるをいふ。

●桂男 月の中にすめりといふ人。即ち月の異名なり。

●あゝいぶりさは 未詳。

●相良布 いかめのこと、遠州相良によく生ずるより相良布と書くといふ。

●荒布 色黒くして葉の届たき海草。

●二貝浦 伊勢の名所。

●いろの濱 越前の名所に此名あり、こゝは其の名所をいへるにはあらず。濱邊に貝を拾ふことを詠みたる古歌多く、それによる貝の濱などありて、いろの貝の跡をたるといふと、いろの貝の跡をたるといふと、西行の歌「潮をむるますほの小貝ひるふとて、色の濱とはいふとやあるらん」。

●河鹿 蛙の一種にて谷川に住み聲のうるはしきもの。小石流れて行く音か からころ

をつゝみて刈るとはすれど、手には取られぬ桂男のあゝいぶりさは、いつ青海苔もかだのりと、身の相良布をなのりぞや、あらめつらしと荒布かる、二見の浦は遙々と松の村立色の濱、蒔繪によくも似たるよな、跡は白雲とばかりを、故郷の夢とそらさめて、庄野に續く龜山は、誰爲ながき萬代と、唧つ涙はせきもせて、フシ何をか關の地藏堂、せめて未來を頼まばや、上り下りて坂の下、谷の川瀬にからりころり、フシころろくとなるは河鹿の鳴く聲か、小石流れて行く音か、いや水の泡散る、玉でないよの、吹駒のひざぶしちんがらが、ちんからからりの鈴鹿山、賤が草鞋の營みに、ふけて藁打つつち山や、だての旅路に行くならば、買ふ

(86)

といふは河鹿の鳴く音か、小川に小石の流るゝ音かとなり。  
 ●鈴鹿山 伊勢鈴鹿郡にあり、坂の下より土山へ越る間の山なり、坂の下に鈴鹿社あり。  
 ●藁打つ山 藁細工をするには生藁を打ち柔かにして草鞋などを造るより、藁打つ藁を土山にもじりたるなり。  
 ●つらおひさ 網代笠のよにて水口の名物なり。  
 ●髪水 美男の髪の水をいふ、昔は油といふものなく、此の水を取りて髪につけたるなり。  
 ●とくく 髪を解くといふとを疾くくと念ぐとにかけたなり。

てもたもれ水口の、つらおひさが露漏りて、をのがまゝなる鬢水は、櫛にたまらぬ亂れ髪、とくく行けば洛陽や、六波羅にこそ、三着かれけれ、地さて父上のおはします半屋はいづくなるらんと、ここかしこに佇み給へば、折もこそあれ梶原源太、町まはりして歸るさに此の體をきつと見て、飼きやつが有様たゞ者ならず、何者さうと咎めける、姫君聞召しさん候自らは、尾張の大宮司が娘なるが、故もなきに父をとられ候ゆる、我命に代らん爲め、是迄参り候と、云せも果す景清、ヲ、皆まで云ふな己れが親の大宮司に、景清が行末を云へといへども知らぬといふ、己れは夫婦の事なればよも知らぬことは有るまじき、既に清水坂の

(87)

●おちる 白状するも、假語に「いふに落ちず語るに落ちる」など。  
 ●高手籠手 背く人を縛り上げたる状。  
 ●六條河原 七條河原などいづれも刑場なり。  
 ●突棒刺又鐵の棒 何れも刑具。  
 ●修羅の獄卒 地獄の鬼といふに同じ。  
 ●八逆五逆 \*

阿古屋は、子の有る中を振り捨て、一度注進申せしぞや、有の儘に白状せよと小腕取て怒りける、地なふ恨めしや命を捨て、是迄出る程の心にて、たとへ行方を知たればとて申さうか、此上は水責火責にあふとても、夫の行方は存ぜぬなり、只父上を助けてたへと、聲も惜まらず泣給ふ、飼ヲ、云ふ迄も無い事さ、己れ落すはたゞ置かうかと、地高手籠手に縛り付、六條河原に引出し、種々に拷問したりしは、なふ情なふこそ、三重見えにける、地梶原親子が奉行にて、方一町に垣を結び、突棒刺又鐵の棒、兵具ひつしと並べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、フシ苛責にかくる如くなり、地いたはしや小野の姫、荒き風にもあて

●十二子の階梯 十二段のはしご。此の小野の姫の拷問を後に「盛衰記」に阿古屋の琴責に作り改へたるなり。

●心も亂れくるめき 亂れの下目。もの二字あるべし。

●甘露法雨

ぬ身を、裸體になして繩をかけ、十二子の階梯に、胴中を縛り付け、あはれも知らぬ雜人共、湯桶に水をつぎかけ、落よくと責めけるは、只瀧つ瀬の如くにて、目もあてられぬけしきなり、地むざんやな小野の姫、息もはや絶えく、心も亂れくるめき、既に最期と見えけれども、いやく、武士の妻と成り、心弱くてはかなはじと、さあらぬ體にもてなし、いかにかたぐ夫の景清常に清水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れと深く教へ給ふゆる、今とても尊號を絶えず唱へ奉つれば、此水は觀音の甘露法雨と覺えたり、今此水にて死する命は惜からじ、夫の行方は知らぬぞや、千日千夜も責給へ、南無や大悲觀世音と、苦しき體を

●枯木責

古木責のとなるべし。

おし隠し、潔くはの給へども、さすが強き拷問に、聲も濁りて身も顛ひ、調よわくとなり給ふは、偕も悲しき次第なり、此分にては落まじきぞ、やれ枯木責にせよやとて、細首に繩を付け、松の枝に打かけて、地ゑいやくと引あぐる、おろせば少し息をつぎ、引上れば息たゆる、フッあはれといふも餘あり、地たとへいかなる鬼神も是にてはおつべしと、二三度四五度責ければ、今はかうよと見えけるが、又目を開きなふ梶原殿、此木の上に釣り上られ世界を一目に見下せども、夫の行方は見え申さず、かたくも慰みに、ちつと上つて見給はぬか、フッ是へくと有ければ、景時腹にすへかね、調偕々しぶとき女かな、此上は引下し火

●焦熱地獄

八熱地獄の一。

責にせよと、炭薪を積み重ね、團扇をもつて煽ぎ立  
く、天をかすめし黒煙、焦熱地獄と謂つべし、地既  
に責めんとせし所に、悪七兵衛景清、いつくにてか聞  
たりけん、諸見物の其中を飛こへ蹴こへ垣の中に躍り  
入り、こりや景清を見參と、はつたとねめまはし、二  
王立にぞ立たりける、姫君はつと肝つぶれ、立よらん  
とし給へば、人々取て引する、地すは景清を遁すなと  
一度にはらりと取まはす、景清からくと笑ひ、エ、  
ぎやうくし、此景清が隠れんと思はば、天にも登り  
大地をも潜らんずれども、妻や舅が憂目を見る悲さに  
身を捨て出たれば、もはや氣遣ふ事はなし、さあ寄て  
繩をかけ六波羅へ連れて行け、妻や舅を助けよと、フシ手

向ひしてんず氣色なし、地姫君涙を流し、口惜の有様  
や、自らや父上は、生てかひなきうき身なるに、御身  
はながらへ本望遂んとおぼさず、何とて是へは出給ふ、  
浅まし御所存やと、又さめくと泣給ふ、景清も涙  
をおさへ頼もしの心底や、人は素性が耻し、子中を  
なせし阿古屋めは男の訴人をしたりしに、御身は命に  
かはらんとは頼もしや嬉しやな、去ながら父大宮司の  
御事心元なう覺ゆれば、御身は是よりとうく歸り、  
菩提を弔ふてたび給へと、鬼を欺むく景清も不覺の涙  
を流しける、フシことはりせめて哀なり、地此事六波羅  
へ聞えしかば、重忠大宮司を同道にて六條河原に走せ  
來り、聞儲も景清人の難儀を救ひ、我身を名乗て出ら

る、段近頃神妙、尤も斯うこそ有へけれ、此上は小野の姫大官司共に御赦免なさる、條、景清に繩をかけ急ぎ引立申すべし、地畏まつて人々繩よ綱よとひしめけば景清悦び、夫こそ望む所よと己れと千筋の繩をかゝり、先に進めば小野の姫、なふみづからも諸共と、駈け出取付泣給ふを、大勢中を押隔てあたりを、拂つて引立行く、景清が心底勇あり義あり誠あり、前代未聞の男なりとて、皆感ぜぬものこそなかりけれ

第四

地斯くて其後、げにや猛將勇士も運盡きぬれば力なし、不便やな景清鎌倉よりの評定にて、六波羅の南表に始

●運 人の身に運り來れる善惡の象なり、或は天命とも。

●牢を立る 特に景清の爲に新しき牢を建てたるなり。舞の本には「頼朝の御座にはいりて雑兵の入たる牢には入るべきぞ始めて牢をつくらせよ承ると申していちぬ、しらかし」とが、楠云々」とあり。  
●しこの木 しこは醜にて、荒削りの唯丈夫を主とせる木の謂なるべし。  
●蜘蛛格子 十文字に組立たる牢の格子なり。  
●大釘の裏をかへさず 大釘を打放しにして、釘の先きの尖頭にて寄付くべからざる如くす。  
●山出し 山出しの人足のこと。

●文王は姜里に囚はれ 文王名は昌西伯と稱す、殷紂王の爲めに姜里に囚せらる。公治長は孔子の弟子「論語」に「練練の中に在りとい

めて牢を立させらる、櫟白樫楠の木、長さ一丈にとらせ、地へは七尺堀り入れ、上三尺の詰牢にしこの木をもつて蜘蛛格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打たれば、劍を植へたる如くなり、七尺ゆたかの景清をふたへに取て押し入れ、髪を七はに束ねて、七方へこそつゝたりける、足を牢より引出し、ゆんでめてへ取ちがへ、山出し七十五人してひいたる楠木にてあげほだしを打たせ、しつ錠詰金、だうくぐるゝ、千引の石材木を積み重ね、首には根掘りの大筒を三本まで擔かせたり、諸人に見せて耻かゝせよと番も警固も付されども、中々五體働かず、されば文王は姜里に囚はれ、公治長は刑戮にかかれり、君が爲名



へども、其罪にあらずといへるを  
取り、いづれも罪なくして囚はれ  
たる例に引き、景清も亦然りとな  
り。刑戮云々は誤りなるべし。  
●世首口を閉たれば云々 観音經  
を讀誦するの外は、一切口をきか  
ず、耳にも入れず、唯働くものは  
兩眼のみなりと。

●生たる顔形見 「養註」よし  
さらば散るまでは見し山櫻、花の  
さかりをおもかけにしての歌の  
心なり。

の爲なんぞかつて憂へんと、観音經、讀誦の外、世言  
口を閉たれば、聲聞耳に閉せり、働く物は兩眼のみ、  
フシ見る目も悲しくあはれなり、地いたはしや小野の姫  
不思議の命助かり、牢屋近きに宿を取り、酒くだ物を  
とよのへて牢屋の格子に立かゝり、フシいたはり給ふ  
ぞ哀れなり、やうくとして景清心地よげに酒を飲み  
爾今日は入骨髓に徹つて候、誠に御身の心ざしいつ  
の世にかは忘るべき、地儲かりそめながら某は天下の  
朝敵、定めて最期も遠からじ、今景清が生たる顔を形  
見にて、とうく御身は尾張へ下り、後世を弔ふてた  
び給へ、是に付ても阿古屋めが心底の恨めしさよ、二  
人の子供も今ははや殺してや捨つらん、思へばく景

●人目しげう

人目しげくなり。

清が運の盡こそ口惜けれと、フシ恨み啣ちて泣給ふ、地  
姫君も涙を流し、御仰はさる事なれども迎も自らは御  
最期の先途を見届け、兎にも角にもなり参せん、一日  
も一時も御命のあらんうちは、往生の御營を、心にか  
けて何事も、定まる事と思召し、人をな恨み給ひそよ、  
いつまでも是に有りたく候へども 人目しげう候へば  
明日又参り申さんと泣くく、歸り 三盃 給ひける、  
フシ 是は儲置 地阿古屋の前いや石いや若もろ共に、  
山崎山の谷陰に深く隠れておはせしが、地景清牢舎と  
聞くよりも、我身も有るにあらばこそ、六波羅に走り  
つき、此體を一目見て、なふ浅まし風の情やな、やれ  
あれこそ父よ我夫と、牢の格子に縋りつき、フシ泣くよ

●生面 生きた顔なり、夫を訴人  
しながら、何の面目あつて今此所  
へ來り我にまみゆるとなり。

り外の事ぞなき、調景清大の眼に角を立、やれ物しらすめ、人間らしく詞をかくるも無益ながら、斯程の恩愛を振り捨て夫の訴人をしながら、何の生面さげて今此所へ來たりしぞ、地己れ指一つかなひなば、攔み控いで棄んものをと、齒がみをしてぞ居られける、地實にお恨はことほりなれども、妾が事をも聞給へ、兄にて候十藏、訴人せんと申せしを、再三止めて候所に、大宮司の娘おのゝ姫とやらんより、親しき御文参りしゆへ、女心の淺ましき、嫉妬の恨に取亂れあとさきのふまへもなく、當座の腹立フシやるかたなく、地兎も角もと申しつる後悔先に立ばこそ、左は去ながら嫉妬は殿御のいとさきゆるゑ、女の習ひ誰身の上にも候ぞや、

●云落り (變註)今云ふ云誤り云  
落しなど、同じからず云ふほど却  
りて非に落ち罪を増すをいふなり

●剛の者 勝れて強き者をいふ。  
●つかみ 見すく又まざく  
などに同じ。

申譯いたす程皆云落にて候へども、今迄のよしみには、道理一つを聞分て、只何事も御免あり、今生にて今一度、詞をかけてたび給はゞ、それを力に自害して、我身の云譯立申さんと、地にひれふしてぞ泣わたる、地むざんやな彌石、父が姿をつくく見て、調なふ父上程の剛の者が、なぜやみくとは捕はれ給ふぞ、いで押破つて助け奉つらんと、地柱に手をかけゑいやゑいやと押せども引けどもゆるがばこそ、フシ不便なりける所存なり、地弟の彌若は、ほだしの足に抱きつき、調いたいかや父上様、なふいたむかと撫であげ、撫下げさすり上、兄弟わつと叫びければ、思ひ切たる景清も不覺の涙せきあへず、地やゝあつて涙を押へやれ子供

●邪慳\*

よ、調父が斯様になりたるはな、皆あの母が悪心にて、  
 繩をも母がかけさせ、牢にも母が入けるぞ、地邪慳の  
 女が胎内より出たるものと思へば、汝等までが憎いぞ  
 や、父とも思ふな子とも思はじ、はやく歸れと叱る  
 にぞ、子供は母にすがりつき、なふ父をかへしや、父  
 上かへせと、ねだれ歎きし有様は、目もあてられぬ次  
 第なり、地阿古屋はあまり堪へかねて、よし此上は自  
 らは兎も角も、かはいやな兄弟に、やさしき詞を唯一  
 言、さりとてはかけてたへなふ、子はかはゆふはおぼ  
 さぬかと、又せき上てぞなげかるゝ、調景清かさねて、  
 おことがやうなる悪人に返答もせじとは思へどもな、  
 今の悔をなど最前には思はざりしぞ、左れば天竺に獅

●あだ人 他人のとも。

●わごぜ そなたといふに同じ。  
 我妻などに對していふ詞。

●獅子身中の蟲 佛説に、佛法を  
 破るものは、外道天魔の業にあら  
 ず、佛子自ら之を破るなりとて、  
 内より禍を生ずるに譬へたるなれ  
 ば、我慢愚痴の輩が、我と我事を  
 破るに喩ふ。

々といふ獸有り、身は畜生にてありながら智慧人間に  
 こえたれ、獵人にも取られず、却つて人を取り喰ふ、  
 されども腹中に蠱毒といへる蟲ありて、此蟲毒を吐く  
 ゆゑに體を破つて自滅すなり、されば女の嫉妬のあだ  
 人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆是我身  
 を責ることわり、わごぜがやうなる我慢愚痴の猿智恵  
 を、獅子身中の蟲にたとへて佛も戒め給ふぞや、汝が  
 心一つにて本望遂げず剩さへ、耻辱の上の耻辱を取り、  
 今云わけて妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清  
 が二たび心をかへすべきか、何程いふても汝が腹より  
 出たる子なれば景清が敵なり、妻とも子とも思はぬと  
 思ひ切てぞ居たりける、地備はいか程申しても御承引

●お主 もとは敬語なるべしといへども、後には目下の者に對していふ。

●云譯せよ 「舞註」云譯せんとあるべき誤りか、此は情道り悲愴なるところなればわざと斯くせしむのか。

●彌石を引寄せ 舞の本にはあこわうに兄の十歳といふ者なし、あこわう景清が久々にて我家に飯れるを見て、窃に六波羅に訴入し、討手の者を引連れ來り、冷なる素振りをするより景清怒り、二子を引寄せ、之をさし殺すことに作れり、而し我家の内なり、景清を牢に入

あるまじきか、詞ヲ、くどいく見苦しきに早やはや歸れ思ひ切たぞ、地なふ最早ながらへて何方へ歸らうぞ、やれ子供よ、母があやまりたればこそ、かく詫言いたせども、つれなき父御の詞を聞いたか、親や夫に敵と思はれ、お主らとても生甲斐なし、此上は父親持たと思ふな、母ばかりが子なるぞや、自もながらへて非道のうき名ながさんこと、未來をかけて情なや、いざ諸共に死出の山にて言譯せよ、いかに景清殿、妾が心底 地是までと、彌石を引寄せ守刀をすばとぬき、南無阿彌陀佛と刺通せば、彌若驚ろき聲を立て、いやく我は母様の子ではなし、父上助け給へやと、牢の格下に顔をさし入れく遯あるく、エ、卑怯なりと引

れ其の前にて此の慘劇を演ぜしむるは近松の作意なり。

●前世の約束

\*

出世景清

四九

よすれば、わつと云て手を合せ、ゆるしてたべこらへてたべ、明日からはおとなしうさかやきも剃り申さん、灸をもするませう、儲も邪慳の母上様や、助けてたべ父上様と、息をばかりに泣わめく、地ヲ、ことはりよさりながら、地殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝぞ、あれ見よ兄もおとなしう死したれば、おことや母も死なでは父への言譯なし、いとしいものよ能う聞けと、すゝめ給へば、聞入つて、あゝそれならば死にませう、父上さらばと云捨て、兄が死骸によりかり、打あをのきし顔を見て、いづくに刀を立べきぞと、阿古屋は目もくれ手もなへて、フシ轉ふしてぞ、なげきしが、エ、今はかなふまじ、必ず前世の約束と思ひ、

母をばし恨むるな、おつゝけ行くぞ南無阿彌陀と、心元を刺通し、さあ今は恨を晴し給へ、迎へ給へ御佛と、刀を咽喉におしあて、兄弟が死骸の上にかつばとふし、共にむなしくなり給ふ、儲も是非なきふせいなり、景清は身をもだへ、泣けど叫べどかひぞなき、神や佛はなき世かの、さりとては許して呉れよ、やれ兄弟よ我妻よと、鬼を欺く景清も、聲を上てぞ泣居たり、フシ物のあはれのかぎりなり、斯くとは知らで伊庭の十藏、梶原が取なしにて、少々くんこうにあづかり、若徒小者あまたつれ、遊山より歸りしが、此體を見て肝を潰し、儲は儲しなしたり、不便の事を見るものかな、これ侍ども、我此如く御恩賞を受け、榮耀榮花に

● 偏執 片意地なるも。又恨み妬む如き場合にもいふ。こゝは母の後者の意に近し。

● いきほれ 「聲註」聲を立るをいきほれを立るといふ。  
● ほつても 逆を強くいふ詞。  
● 細に給ほつてもないなどと同じ。  
● いまつはいで いまつげになり。

榮ゆるも、きやつらを世にあらせん爲、此頃方々尋ねしかども行方のなかりしが、儲は何者ぞ偏執を起し害せしか、但しは大宮司がはからひと覺えたり、よし何にもせよ尙ほ景清に云分あり、先づく死骸を取置と傍らに葬ふらせ、牢屋に向つて立はだかり、是は妹御殿、いつかに恨あればとて、現在の妻子を殺させ、腕かなはずばなどいきほねでも立ざるぞ、内々は某御邊が命を申うけ、出家させんと思ひしが、最早ほつてもならぬ、侍畜生大だはけと、いかつはいてぞ申しける、景清くつくと吹き出し、こりやうろたへ者、彼の者共は己れが貪慾心を悲み、自害したるが知らざるか、夫さへ有るにうぬめが口から侍畜生とは誰が事

べろく

臆弱なること。

●腕なしの振りすんばい。〔要註〕俗諺なり、ふりすんばいと云ふは、石と書きて石を投げる事なり、腕なきものは石投げをせんとは、腕はぬ事にいふなり。享保三年板敷にまくは「腕なしの振りすんばい、瘦法師の酔このみ云々」とあり。●痙癖 痙の一種、即ち胸の痛みなり。

ぞ、命を惜む程ならば、斯る大事をたくむべきか、また生けふと思ふ程ならば、べろく柱の五十や百、此の景清が物の數と思はふか、心中に観音經讀する嬉しさに、慰み半分に牢舎して有るものを緩怠過たるたはこと吐き、二言と吐かば摺み挫いて捨んと、はつたと睨んで申さるれば、十藏かんらくと笑ひ、其の警めに逢ひながら某を摺まんとは、腕なしのふりすんばい、片腹いたし事をかし、幸ひ此頃痙癖痛きに、地ちつと摺んで貫ひたしと空嘯きてぞ居たりける、景清腹にすへ兼ね、いで物見せんと云もあへず、地南無千手千眼生々世々、一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力と、金剛力を出し、ゑいやつと身ぶるひすれば、大釘

大繩ばらくずんときれてのいた、貫木取て押歪め、扉をかつばと踏倒し、大手を廣げ躍り出、八方に追ひ廻すは、暴れたる夜叉の三童如くなり、フシ群がる若徒中間はらりくと蹴倒し、十藏をかい摺み取ておしふせ、脊骨も折れよとどうとふまへ、調なんと景清を訴人して御褒美にあづかり、榮花といへるは此事かと二つ三つ踏付れば、なふ悲しや骨も碎けて息も絶入候、御慈悲に命を助け下されと、聲をあげて泣にける、景清手をたつき打笑ひ、ヲ、某が褒美には廣い國を取らせんと、兩足取て逆様に引上、肩を踏へてゑいやつと裂ければ、胴中より眞二つに、フンさつと裂けてそのきにける、エ、心地よし氣味よしと、弓手馬手へからり

と捨て、地さあ爲すましたり此上は、關東へや落ち行かん、いや西國へや立のかんと、ゆきつ戻りつ、戻りつ行きつ、一町計り走りしが、いやく此度落失せなば、又大宮司やおのゝ姫、憂目を見んは治定と、思ひ定めて立返り、もとの牢屋に走り入り、内より貫木しとよしめ、地干筋の繩を身に纏ひ、左あらぬ體にて普門品、讀誦の聲をおのづから、即身菩薩の變化ならんと、皆感ぜぬものこそなかりける

第五

地斯くて其後右大將頼朝公、南都の大佛御再興ましまし、既に成就と訴ふれば、供養の報赦に急ぎ大赦を行

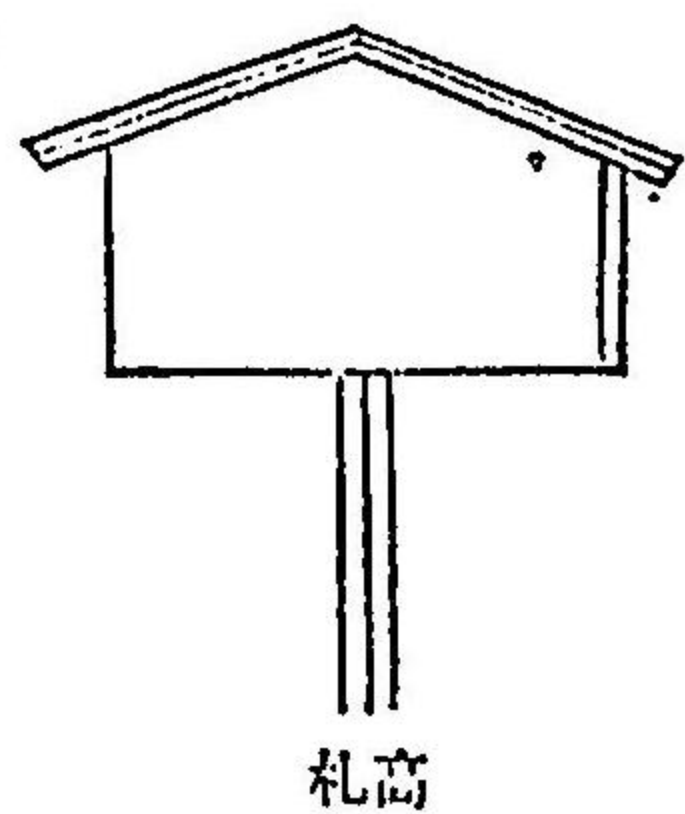
●巨椽堤 山城宇治のほとり巨椽の池ありて其の堤をいふ。

ふへしと、天が下の科人京鎌倉の牢を開き、残らず御免なされける、中にも悪七兵衛景清は、大事の朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郎に仰せ付られ、終に首を刎られ今は四海大平なり、大佛供養御聽聞あるべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける、路次の行列 三重 花やかなり、フシ既に吾君、巨椽堤にさし掛り玉ふ時、畠山の重忠息を計りに走來り、御馬の前に跪つき、偕も悪七兵衛景清は御成敗の由承り候へ共、未だ恙なく牢の内に罷在り候、一大事の囚人なれば早速首を刎られ、然るべく候はんと謹んで申し上る、頼朝聞召し、不思議の事を申すものかな、景清は佐々木の四郎に申し付、一昨日の暮程

に首を打たせ、則ち其首頼朝が見参して、獄門にかけさせしが、僻事なるかと仰ける、重忠重ねて、其段は存ぜず候へども、重忠は今朝景清が生顔を、たしかに見て参り候と、云も果ぬに佐々木の四郎つと出、いや是畠山殿、筋なき事な申されそ、其景清は某仰せを承り、高綱が手にかけ首を刎ね、我君の實檢にそなへ、三條噺に獄門に掛けて候ものを、景清が二人有るべきか、近頃麓忽千萬と嘲笑つて申さるゝ、重忠聞給ひ尤々御分が手にも掛つらめ、又重忠も確に見て候はいかに、高綱色をちがへ、はて埒も無いこと、一度斬たる景清が蘇生るべきやうもなし、夫は定めて血迷ふて何かな見つらん、但しは寝惚けて夢をば、見給ふか、い

●段々 「舞註」漸々の段々にあらず、高綱の申す段、重忠の争ふ段々を叫し札なり。

●高札 公儀の禁制にかゝる條目



を記し之を街に高く掲げ置く故に高札といふ。こゝは景清が首を獄門に掛け、其の罪状を記したる高札なり。

やさ御分が狼狽て、由なき者を景清と思ひ切たるか、夢を見たるかあはてたるか、是目をさまして思案せよと、フッ氣色變つて争ひける、頼朝段々聞召し、いか様佐々木畠山麓忽有る人にてなし、不思議千萬はれやらず、いで是より取て返し、頼朝直に見分くべし、各々静まれ、と、御馬の鼻を立直し、都に歸せ、三重給ひける、フッ去程に、三條噺に景清の首を切かけ、平家の一族叛反の棟梁、悪七兵衛景清と高札をそへられたり、頼朝立寄り御覽有り、高綱重忠を招き是見られよと仰ける、重忠も不審晴れず諸大名立かゝり、よく見れば今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫奕として千手観音の、御首と變じ給ひける、フッ歴劫不



●御首 みぐしは首又は頭に對する敬稱なり。故に神佛の御首のをみぐしといふ。(釋註)「みぐし」とすみて讀むべきか、「醒醉笑」に寺の兒が佛の首といひて三車取る秀句あり。

●歷劫不思議 「法華經」(普門品第二十五)に「弘誓深如海、歷劫不思議、侍多千億佛、發大清淨願」とあり。註に「觀音四弘の誓願ふかさごと海の如し、萬劫を経て思ひがたし、此菩薩の修行は諸佛に隨從ありて智慧の光をいだして衆生の無明のやみを照す大願をおこすなり。」

●しがつし所に (釋註)しがつし所を強くさするなり。早かりしを早かつしなどいふ類なり。

●大衆 大勢の僧のこゝ。叡山の大家など。

●蒲 神社佛閣の擔の目除に用ゆる戸なり。舞の木には「菰格子も皆開きて御帳をさつとおしあけて御くしもなきみそき蓮華の上になはりて云々」菰だけでは少しく省筆に過ぎたる如し。

●禮盤 導師の参りて禮拜する臺をいふ。

●觀世音 兵衛が命にかはらせ給ふ有難さよと、地御

思議ぞ有難し、地しかつし所へ清水寺の大衆達、我もくと走参じ、爾も一昨日の夜中より佛前の蔀おのくあきて候ゆる、若し盗人の業にやと御戸を開きて候へば、觀世音の御首きれて失させ給ひ、切口より血流れて禮盤長床朱に染み、勿體なき御ふせいに拜まれさせ給ひ候ゆる、驚入て注進申上候と、事の次第を申上れば、地君を始め奉り畠山も高綱も、供奉の上下おしなへて、あつと感ずるばかりなり、地君信心の感涙を流させ給ひ、誠や景清年来清水寺の觀世音を信じ奉つり、十七の春より卅七の今日まで、毎日三十三卷の普門品を讀誦懈怠なく修行せしと聞けるが、疑ひもななく觀世音、兵衛が命にかはらせ給ふ有難さよと、地御

●願摩 めるでの木を焼き佛に祈願する修法なり。願摩を焼けば一切の悪事の根本を焼滅すといふ。一萬座は願摩を焼きし數なり。

●枯たる木にも咲花の、千手の誓ぞ有難き 「古今著聞集」に「いつれの佛の願ひより千手の誓ぞたのもしき枯れたる草木もたちまちに花咲きみのると説きたれば云々」これ「千手陀羅尼經」の詞を譯したるなり。

手を合せ給ひければ、僧俗男女下々まで、皆々禮拜恭敬して、フン涙を流さぬ者はなし、地重ねての御錠には斯ては如何勿體なし、急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩をたかせ、御くしを繼奉つれ、法事の上にて景清にも對面すべし、いざ頼朝も参詣せんと、御身を清め、佛の御首を直垂の袖にうけ入れて、清水寺への御参詣ためしまれにぞ三重聞えける、フン枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ぞ有難き、地斯くて頼朝御法事も事終り、佛の御首をつぎ参らせ、宿坊に入せ給ひける、地時に佐々木畠山、景清夫婦を伴ひ御前に出らるゝ、頼朝御覽じ珍らしや景清、我を平家の敵とて狙ひ討べき心ざし、神妙々々尤も武士の憤り實にさ

うも有へけれ、然れば頼朝が爲には御邊は又敵なれば、討て棄へき者なれど、汝が身には觀世音入替りましませゆゑ、二度誅せば觀世音の御首を二度討つ道理、勿體なし、若し又頼朝運盡て御邊に討たるよものならば、觀世音の御手にかゝると思ふへし、地此上は助け置、日向の國宮崎の庄を宛行ふと、御懇誠の御詞に御判をそへて給はりける、景清涙をとぐめかね、誠に身に餘りたる御誼の段、生々世々に有難き、魂に徹つて覺え候、地斯く情ある我君と知らで、狙ひ申せし景清が、所存の程こそ悔しけれと、御前をも打忘れ聲をあけてぞ泣居たり、地備御土器給はり、諸國の大名残りなく、地皆々盃さし給ふ、地重忠仰せけるは、かゝ

●屋島にて功名の様子 屋島は淡路國山田郡に屬す、壽永の亂、能登守教經の據りし所、景清は教經に屬し、此の屋島にて戦功あり、其模様は次の戦物語に詳なり。

●なつかし事 前のしかつし所と同語法。

●いかじき \*

る目出度折と云ひ、且うは我君御慰みの爲、和殿屋島にて功名の様子語つて聞かせ給へ、内々君も御所望ありしぞ、ひらにくと有ければ、頼朝公を始め参らせ、満座の人々一同に、フシはやとくくと望まるゝ、地景清辭するに及ばねば、袴の裾を高くとり、御前に色代し、地ナクリ 過し昔を語りける、いで其頃は壽永三年 閏三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸にわかつて、互に勝負を決せんと欲す、能登守教經の給ふやう、去年播磨の室山備中の水島鶴鳥越にいたるまで、一度も味方の利なかつし事、ひとへに義經が謀いみじきによつてなり、いかにもして九郎を討取る謀こそあらまほしけれとの給へば、景清心に思ふやう、

●按のうち物 按のうちに打物とかけたるなり。  
●なにがし それがしといふに同じく古風なる稱呼なり。

判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨て易かりなると、教經に最期のいとまこひ、陸に上れば源氏の兵、あますまじとて駈向ふ、景清是を見て、物々しやと夕日かげに打物ひらめかいて、切てかゝれば怖へずして、双向ひたる兵は、四方へばつとぞ逃にける、さもしやかたぐよ、源平互ひに見る目も耻かし、一人をとめん事は按のうち物小脇にかいこんで、何某は平家の侍悪七兵衛景清と、名乗かけく手取りにせんと追ふて行く、箕尾谷が着たりける、兜の鍔を取はつしく、二三度逃のびたれ共、思ふ敵なればのがさじと、飛かゝり兜をおつ取り、ゑいやと引程に、鍔は切れて此方にとまれば、主は先へ逃のびぬ、地はるかに

●景清君の後姿をつく、と見て舞の木には、頼朝の前にて述べたるばかり刀を抜きて飛つゝるとなし、兩眼をくりぬくとは相同じ。但し舞の木にては、一たん眼をくりぬけども、観音の靈現にて再び元の如く癒るとにしたり。

隔て立かへり、さるにても汝恐しや、腕の強きと云ければ、景清は箕尾谷が、首の骨こそ強けれと、フツ笑つて左右へ退きにける、昔忘れぬ物語りお耻かしう候と、語り給へば人人は、フツ一度にとぞ感じける、地斯くて我君御座を立せ給ひければ、大名小名續いて座を立給ふ、景清君の御後姿をつくくと見て、腰の刀をするりと抜き、一文字に飛かゝる、おのゝはと氣色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清すさつて刀を捨て、五體をなげうち涙を流し、ハ、ア南無三寶淺ましや、いづれも聞て給はれ、かく有難き御恩賞うけながら、凡夫心の悲さは昔にかへる恨の一念御姿を見申せば、主君の敵なるものをと、當座の御思

は早や忘れ、尾籠の振舞面目なや、眞平御免を蒙らん、  
 誠に人の習ひにて心にまかせぬ人心、今より後も我と  
 我身を勇むるとも、君を拜む度毎に、迎も此の所存は  
 止み申さず、却つて仇とやなり申さん、兎角此の兩眼  
 の有る故なれば、今より君を見ぬやうにと、云もあへ  
 ず差添抜き、兩の目玉を抉り出し、御前にさし上て、  
 首をうなだれ居たりけり、頼朝甚だ御感あり、前代  
 未聞の侍かな、平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩を  
 も忘れず、末世に忠を盡すべき、仁義の勇士武士の手  
 本は景清と、數の御褒美淺からず、鎌倉さして入給へ  
 ば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の普門品を讀  
 誦して、日向の國を本領し、悦びく退出す、なほ

く源氏の御繁昌、國靜謐の始なるはと皆、萬歳をぞ  
 となへける

# 三世相

## 解題

此の作は狛の左京盛光といふ樂人曾て難波の遊女夕霧と契りて春姫といふを設けたるが、春姫十三歳の時父の不在に繼母は一家の樂人近藤兵庫と通じ、春姫を虐待し且之を失はんと圖りしを、望月六郎左衛門といふ忠義の侍ありて、危ふく一命を助け、北嵯峨に落ちて靜三が庵室に身を寄せ、こゝにて圖らず父の左京に邂逅せしが、兵庫の追手急にして再び父と別れ、それより春姫は難波に下り、廓を訪づれば、野といふ夕霧の妹女郎に逢ひ、亡き母の昔語りを聞き、下寺町淨國寺なる夕霧の墓に詣で、回向をなし、亡き母が地獄に墮ちて苛責に苦む所を夢み、一方兵庫は其の後惡事顯はれ、繼母もろとも罪を悔ひて自滅し、狛の左京は再び世に出で、春姫は官女に召出さるゝといふ事を仕組みたるものなり。外題については、夕霧が遊女のうち多くの人を迷はしたる罪が、過去の業因となりて、春姫が身に苦報を受けしも、

春姫及び萩野等の殊勝なる念佛供養の功力によりて、さすが罪深き夕霧も、來世には往生を遂ぐるといふ、これ即ち三世相の謂れなり。

此の淨瑠璃は、是迄「遊君三世相」として世に知られ、「外題年鑑」には宇治加賀掾の淨瑠璃中に其の名ありて、竹本座のうちにはこれなきより、宇治淨瑠璃なるかの如く思はるれど、全く然らず。外題も最初は三世相にして、遊君の二字は後に加へたるもの、如し。又此の作の奥附を見ると、貞享三年五月吉日、竹本義太夫の文字あり、而してこれが宇治の古淨瑠璃などを用ひたるものにあらざる事は、夕霧の歿したる事を九年以前といへるを見て、貞享三年の作なるを知り、義太夫の爲めに、近松が新作したる淨瑠璃の最初のもの、一なる事を確めたり。即ち「出世景清」佐々木先陣「多田満仲記」等と同年の作なるを、如何してか「外題年鑑」に洩したるなり。加賀掾にて若しこれを語りしとすれば、更に後の事ならざるべからず。

### 三世相

近松門左衛門作

序 關々たる雫鳩のみさごは河の洲にあり、窈窕とたを  
やかなる淑女のよきむすめは君子の好述也、情は禮の  
用心の匂ひ仁義の花、今此時にかうばしく人の風情も  
色ふかき、我君が代ぞ、フシさかんなる、地よつて  
中宮御平産の御祈り、諸社の奉幣多き中に春日の宮へ  
は、權大納言頭の中將發向にて、臨時の御神樂古例を  
ひき、神官丹心をおこし樂人家々の、秘曲を盡すをみ  
衣、神慮も、動き給ふへし、地勅使あくの屋に入給

●關々たる雫鳩云々 「詩經」關雎の章「關々雫鳩在河之洲、窈窕淑女君子好述」を取て序としたり。此の詩句を本文にて、直ちに註釋したるは珍らしき書方なり。即ち雫鳩のみさご、窈窕とたなや、淑女のよきむすめの如き是なり。詩の意義は、周の文王未だ四伯たりし時、夫婦申至つて睦まじく、文王が賢なると同時に、妃大似といふも淑徳高き賢女にて、一家圓滿に修り、眞に一國の師表たるべきものありしより、其の聖徳を稱賛したるなり。雫鳩は雌雄たゞしく睦まじき鳥、關々は其の啼聲なり。好述はよきつれあひ、即ち、情は禮の用心の匂ひ仁義の花と凡て何事も一家の和合に基づかざることをさしなへり。  
●當今 今の天子を申上るなり。

其の御名を記さるは、御多ければなるべし。その此の浄るり、夕霧の九年忌の事を作り、時代は假りに王代の事にしたれども、其の時の事なれば遠慮したるものなるべし。

●中宮 皇后御所を中宮といふ。又皇后を中宮と申す。但し後には皇后の外に設けたる妃の位の稱となりぬ。

●諸社の奉幣 朝廷より諸社へ奉幣使を立られ、中宮御安産の祈禱をなすなり。

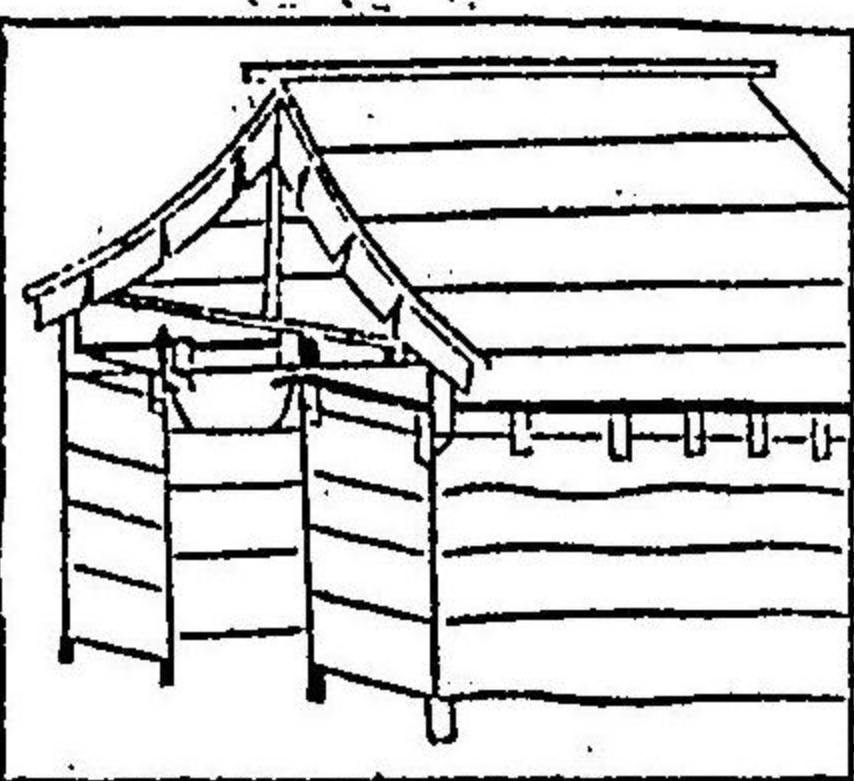
●頭の申附 頭は藏人頭の尊稱。此の職は殿上を管領する官首にて頭と音にて呼ぶ。

●丹心をおこし 丹精を披んであること。即ち赤誠をこめて祈禱するなり。

●なみ衣 なみは小忌又は小齋と書く。白衣の背摺にて、刺し狩衣の如く右の肩に二條の赤紐をつけ、袖の中央に紙捻を垂る。喪祭のいづれにも用ふる服なり。

●あくの屋 大祭または因襲など執行するに當り、新たに假屋を設けて齋場となす、これを假舎といふ。

ひ神官樂人に對面あり、御神事つゝがなく先以珍重也、ついでには來月下野國日光山にて、天下太平の御祈念にたへて久しき明德の御神樂有へし、地をも明德の御神樂とは、神道の秘密神祇官の輩一子相傳す、されば是に合する管絃の大事、伶人の秘傳にてしりたる樂人世に稀なり、若々傳へぞんじの方あらば此度の役儀をつとめ、御褒美にあづかれよと宣へども、誰あつて傳へしものなく廿餘人の樂人さしうつ、ふいでぞゐたりける、神主申されけるは、爰に狛の左京盛光と申樂人、舞樂の事は申にをよばず詩歌の達者有職の大事、傳へぞんじて候が今日は障り有てまいらす候、地かれを召れて御尋ねもやと申さるれば、急ぎ召せとて神主



舎 榊

●恙なし 恙は疾病に罹り難儀すること。されば恙なしといへば、無事を意味す。

●珍重 目出たしと喜び祝ふ調。日光山 もと二荒神社とて事代主神を祭り下野國の一の宮なり。東照宮は後に祀る。

●明德の神樂 盛光の調に説明せり。

●神祇官 古へ太政官の上にある官にて、神祇の祭禮、巫祝、龜卜社頭、社人等の事を掌る。

●管絃 雅樂のこと。

●伶人 樂人のこと。

●狛左京盛光 狛氏は南都の樂樂師にして、光季光高など名あり。

より、使者をこそは、フツ立らるれ、地狛の左京盛光は紅梅の狩衣、をり色の指貫ふみしたき勅使の御前に畏り、調明德の御神樂つけもの、事御尋に預り候、我家に傳へしは天の岩戸の明初し、陰陽のしらへ序破急の三段に五調子をしらへかへ、せいしんの感應菩薩の來臨、天武天王袖ふる山にて奏でさせ給ひつる、そのから玉の乙女子が歌の調子に候と謹でこそ申しけれ、地大納言殿聞給ひ、扱々御邊は御代の重寶忠節のもの、しからは都に誘引し奏聞をへて、日光山の御神事修行の後恩賞は望にまかせらるへしと、懇に宣へば左京進首をかたふけ、調有がたき御詠藝の冥加にかなひ候、一藝に名をはつする御恩の上、御褒美においていさ、

盛光も其の一族なることいふまで  
もなし。此の作に樂人を主人公と  
したる事、當時何や當込むところ  
ありしなるべけれども詳ならず。

●舞樂 雅樂に伴ふ舞。

●有職 故實の例式など明むる事。

●天の岩戸の明初め 天照太神須  
佐之男命の狂暴を憤り、天の岩戸  
へ隠れし玉ふ、これが爲天地晦  
冥となりて天日を見ざる事久し、  
こゝに於て八百萬神協議し、天日  
づめの神をして舞はしめ、手力男  
神をして岩戸の戸を開かしむる事  
神代記に見えたり、天の岩戸明け  
は此の時の事といふ。

●序歌 音樂の通詞、初申後と  
いふが如し。

●五調子 同上、宮角徵羽を五  
調子といふ。

●せいしん 誠心なるべし。

●から玉 舞珠にて外國渡來の珠。

●加階 官位昇進をいふ。

●節 ぬさのこと。神の祈りに捧  
ぐる幣帛なり。

●三笠山 春日山の内に三笠山と  
て小山あり、こゝに春日明神鎮座

か望み候はず、去ながら某娘一人持て候、春姫とて十  
三歳かたちも人並に生れ付ては候へども、生の母には  
なれ繼母が袂にそだち剩、此頃は眼病にかされ候へ  
ば、彼といひ此といひふびんのものに存候、此度の  
御恩賞にかれを大内へ召出され、宮仕の有様をしらせ  
候は、生前の御恩澤としみぐと言上す、大納言  
殿聞召尤のしだい也、娘が事は云に及ばず、其方の官  
加階某執奏申へし、先々用意致されよと又神前に打む  
かひ、御暇の幣をさよげはや御歸りといふころの、な  
がえにつゞく御供人みかさと申せ三笠山、袖ふれてさ  
よ神樂、きねが鼓の調へまで萬歳樂と、そ三重よば  
ふなる、フシ誠成かな、地一藝に名あるものは用ひられ

あり。  
●一箇に名あるものは用ひられざる  
なし。古語に、凡そ一藝に名あ  
るもの世に用ひられずといふこと  
なし。

●傳馬

●あやかりもの

ずといふ事なし、左京進の屋形には譜代の執權望月六  
郎左衛門高貞、同一子小六郎御供まはり道中の、傳馬  
乗物荷物なんどよさよめいて、あなたのはなむけこな  
たのことつて、フシ悦びあふ事限りなし、地かゝる所に  
一家の樂人近藤兵庫守廣忠御出なりと案内す、左京  
進立出こなたへと奥へ請じ、兵庫守申されけるは、樂  
人多き中に貴殿此度一藝の徳あらはれ、關東へ下向の  
段さぞ御満足察したりあやかり物、扱留守の中は何事  
も御用のあらば承らんといへば、早速の御悦び過分  
く、扱留守中は家來にて候望月六郎左衛門を殘し置  
候へども、申ても下部也ことに娘春姫眼病といひ、母  
は繼母に候へばもしもの事の候は、世間ていも氣の毒



也、必々遠慮は御無用内外共に頼むとあれば、兵庫打  
うなづきヲ、サく、男の留守として遠慮するは他人む  
き、隣家といひ一家といひ、神ぞじよさいは致すまい、  
地心やすう思はれよ、ヲ、頼もし、萬事は貴殿にまか  
すると、神ならぬ身のかなくも知らず頼みしうたて  
さよ、地表に馬のいばふ聲して御供も揃ひたり、さあ  
くお出とすむれば北の方春姫諸共表に出御盃暇乞  
とりぐの其中にも、春姫父の袂に取付、やがてく  
とまつはりて御土産には東の扇、富士の山書たるをと  
しほらしく宣へば、父は名残惜げにておとなしう留守  
をし、目をもよくく養生せよ、やがて歸らんさらば  
くと有けれ共、かりそめながら百里の旅、こしぢの

●般若坂 般若路のこと。和州  
菟跡函考に奈其坂般若路の二つ  
の道定ならず、今の大道の其東  
に伊賀よりの道路ありし是らに  
や……平家奈其を攻めぬべき由聞  
えありし程に大衆も勢をまればあ  
つめ奈其坂般若路の二つの道に堀  
をほり城柵を構へて待ちたり。

●生駒山 河内と大和の國境にあ  
る山。其の山頂を關上峰といふ。

●けうこつ 輕忽は速に事しまし  
く異様なる風をいふ。

かりの心地にて、いつかはあはん春姫とつむ涙の聲  
くもり、親子は袖にすがりあひ、フッしはし、物をも宣  
はず、高貞いさめてア、いまくしとくく入てあ  
と賑はしの御祝義あれ、我等は般若坂迄見送り奉らん、  
地さあらば御出とすめ申せば馬引よせて乗懸の、望  
月小六が旅装束笠に嵐のさらさらさらば、さらば  
や生駒山、あとに見捨て出給ふ心の、内こそ、三葉あ  
はれなれ、去程に、近藤兵庫守廣忠は、兼て左京  
の北方に心を通しゐたりしが、一二町も見送りすぐに  
留守へ立返り、内儀くとよび出す、はつといひて  
出る所をしかと抱く、こはけうこつ何事と、逃んとす  
ればア、かしましく、日頃の詞とは違ひたり、首尾

あらば某が思ひをはらさせ給はんと誓文迄立給ふ、主  
 有人にかういふからは命をば捨てをく、地なんとく  
 と抱きつく北の方いきをつめ、顔を赤めて返事もなく  
 途方にくれてあられける、兵庫つきのけ飛び退り、  
 詞日頃の詞を違へ今に成て返事のなきは、必定某をた  
 らせしな、いふても是は一大事今更いやといはせてす  
 むべきか、地とても合點なきならばさし殺し某も、婆  
 娑の苦を遁れんと太刀をするりと抜ければア、しばらく  
 くく、兼々の御詞わらは申せし事もあり、何が扱  
 くさ程のお心をむげには致さじ去ながら、女心のあ  
 さましく身もふるはれてをそろしく、何のわかちもな  
 く前後に忘じ候ぞや、誠に世の中の大事とは此事とつ

●や下大事 易いやうで易からざ  
 る事。二言芳談「往生は大事なる  
 事のヤスキ也」(俚言集覽)  
 ●氣の毒 こゝは文字の通り心の  
 妨げとなるをいふ。

くと胸をすへ給へといへば、是は愚の仰ごと、くど  
 いいひぶんなれども命々とすがりつく、地ヲ、されば  
 いの其お心と見たればこそ、二世とかねたる夫の目を  
 ぬく誠の殿御は主様ぞ、未來はまよよと戯ふるは、  
 フシ見る目も悲しくあさましく、地やよあつて女房申  
 てもやす大事、左京殿の手前は首尾よく暇取そもじ様  
 とそひ申さんが、詞それ迄の氣の毒有、あの春姫は御  
 存のごとく自らがなさぬ中、殊更母めはの、津の國の  
 遊女の子にて候、地自ら未だなれぬさき左京殿、かり  
 そめに馴染まふけ給ひしを、かの傾城死して後妾が介  
 抱いたせども筋をあらはし根性悪敷日暮ほむらをもや  
 し候、かうしたそぶりを見聞なば尾鱗を付て如何様に

●餅飯殿 餅飯殿は興福寺附近の町名なり。和州傳跡函考に曰くもちの殿町は舊名福貴島柳五月一日に始めて藤の供御を捧げしより此名あり、其後蓮の辨財天を勧請の時餅飯の供具を奉りしより餅飯殿の名あり云々。

●猿澤池 南郡興福寺の南にあり天竺の彌猴の地を移したるにより此の名ありといひ傳ふ。

●たゞとる山のほとけす 古き

か申へき、所詮あの娘を殺しこはいものなく心の儘に添申さん、いかゞはあらんといひければ、開兵庫聞もあへず、それは何よりいとやすし、いでねち殺さんとかけ出るをやがて引とめ、地のふ急く事にて候はず、疵をつけて殺さん事只今にも郎等の六郎左衛門歸りし時、何といひわけし給はん、しづまり給へととゞむれば、調ム、それもさう、して何として殺すべき、チ、それにこそ思案の候、地此頃は眼病ゆへ毎日餅飯殿の目醫師の方へ通ひ候、道に待受猿澤の池へ投げ入失ひ給はゞ、誰知る者も候はじ何とくと叫げば、チ、智恵ありくさあらば賺して出されよ、先へまはつて池へおつはめ何の手もなく殺しなば、たゞとる山の時鳥

●秀句。『醒睡笑』に「或もの山路へ行き不慮に白鳥をひらふたり更なる鳥の名を知らず、人に向て語る聞者大は郭公であらうすと云、いや大なる鳥なり中々小鳥ではないさりとて時鳥にスウマタ、トル山の郭公とて時鳥からあることと。」

●薬師 ぐすしは今いふ醫者のこと。

●蛇籠 急流の堤などに、長さ竹の籠に石を入れ、水を防ぐ、其の形の長くして大蛇の横はるに似たるより蛇籠といふ。

ほととつては是因果め、みめといひ心といひ分別は男まさり、愛宕白山侍冥利、何もならぬと手を頂き、池のほとりへ 三垂 忍びけり、フシ目さへかすみの、春姫は、花見ぬ色も山吹の、服紗に拭ふ涙の露、杖が案内に闇たどる、盲目と人や笑らん、ア、いかなれば自らは、誠の母は見ず知ず、フツらきがうへに憂き病、地あはれ佛神ましまさば、病苦を助けたへかじと、ふりあふのけば兩眼は、やゝしみわたる、風の柳のをとするは、猿澤の池ならんア、嬉しや我頼む、薬師の方も程近し今しばらくと急げども蛇籠破れて石あらく、石につまづき伏し轉び、忙然として立にけれ、地先へ廻りし兵庫守時分はよしとつかくとより、むんづと

●銀魚 金魚と同じ。古詩などに銀魚と吟じたるものあり。

抱き投げんとすひらりとはずして、なふ悲や何者ぞ、  
出合くと杖もつて打ちまはる、詞ア、是苦しうない  
者兵庫なるが、詞已に池へ落とせし故抱きとめて有  
けるぞ、地めのとをも連れずして危しく命一つ拾ふ  
たはといへば、詞ム、扱はおちご様か、地池とも溝と  
も見えはこそ、さあお醫者様迄手を引てと、殺すと知  
らで頼みしは、フンをろかにも又あはれ也、地兵庫思ひ  
の外に仕損じたり是非透を見てをつはめんと思ひ、  
詞是々春姫、目を早く養生せよ此池の魚見せたし、  
地あれく鮎もあり鯉もあり金魚銀魚の鱗ふるていエ  
、見せたしく、詞あれ居守蛙の水底を這ひありく、  
是はくとそののかす春姫重て、何と居守も有と宣ふ

●居守 其の形居守の如く、背は黒く腹は赤し、水庭に住む。これを黒焼として、其の粉をほれた人に振りかゝる時は、其の人必ず靡くといふ俗説あり、居守ほれ類などいふ。

●蜥蜴 蛇に似て四足あり、長さ四五寸種々あり、縞とかげ、赤とかげ、こゝにいふは背とかげにて有毒なりといふ。

か、地なふ其居守といふ蟲は夫婦の契り深き蟲、女たる身は手具足に持ぬれば、思ふ戀がかなふてよい殿もつと承はる、一疋取りて給はれといへば兵庫打笑ひ、  
詞扱々小癢な今から男もつて何にせんといふ事ぞ、地いや夫ほしくはなけれども、母上様がまゝしくて萬つらくあたり給へば、早く我等も縁につき今の憂目を遁れたく、ことに誠の母様は罪深き傾城とかや、御菩提をも甲ふため殿御ほしう思はるゝ、戀の結びの居守の蟲  
フン取てたへとぞ望みける、地兵庫思案し幸ひと思ひ、岸のひたいに匍ひ出る瑠璃色して青光る大毒蟲と聞へたる蜥蜴を捉へ、詞さあく居守を取たりといへば、  
チ、忝し有難しと、地目拭ふ服紗にをしつゝみ、肌

●いふせし  
いぶせしは心のさへ  
うたてしの意。

しつかとこめけるは、フシ世にいぶせくぞ見えにける、  
聞いやは春姫、此居守もつたる分にて戀はかなはぬ、  
人に隠して生ながら一呑に呑ぬれば、忽殿御まふくる  
ぞ、大事にかけて三度戴き一口に呑めといへば、何是  
を呑めば戀がかなふとや、地しからは今夜のみません、  
嬉しや明日は殿もたん嫁入して母上の、後世弔らはん  
と悦びしは、フシ是非に及ばぬ風情也、地繼母待兼かち  
はだしにてかけ来り、聞此體を見てエ、またるいそこ  
のき給へと、地するく走りより春姫の小腕ひつた  
て沈めんとす、なふ悲やと土にひれふし泣き給ふを、  
引起さんとせし所へ望月六郎左衛門高貞、主人を送り  
歸りさまに此體をきつと見て、はつと驚きわつて入、

兩人を取てつきのけ春姫を抱きかこひ、あたりを睨め  
て立たるは、フシ心地よくこそ見えにけれ、地高貞ひざ  
たてなをし是畜生共、聞まんざらの他人さへ物のあは  
れは知ぞかし、いかに血をわけぬとて親子と名付は一  
世二世の縁ならずや、よくもく手づから沈めて殺さ  
んとは、地ヲ、企んだりく、天道知ずの人外と齒嚙を  
なして怒りける、聞繼母色を變へやれ六郎左衛門、  
聞女ながらも主たる身につかふ詞も有べきに、人外よ  
畜生とは何事ぞ、よし自らに悪事あらばこそ、地此子  
がひとり行事をいかゞと案じ、抱きて歸るを殺すとは、  
そも我に何の意趣有て冤をいふぞ、地左京殿の留守な  
れば自らを侮るか、エ、口惜し無念やと涙を、流し申

●みだけだや 居丈を高く擡すと怒りの強き時などの状。

さるゝ、高貞少もたゆまず、詞なふ口は調法、いかに程にいふとても逆ねだれをくふ男でなし、是さ兵庫、常々御邊が身持心得ぬと思ひしに、扱こそく己れ不義者男畜生、主人の妻女を寝取しぞ密通にまぎれなし詞をつがふたわすれなといへば、兵庫のだけ高になり、やいさ雑言も事による、主有る女に密通の不義といはれ侍の一分たゞず、但し證據ばしあるか證據を出せ、うろんならば高貞全くそこを立たせじと鏝くつろげてつゝかゝる、高貞かつらくと笑ひ、ム、侍が立ぬとはあつばれ見事いふたりく、こりや證據たゞしく見届たらば此詮議にはおよばふか、夫の留守に出入は大方法も有ものぞ、地かゝる非道の人非人頼むと有し

主君心の口惜さよと、鏡のやうなる眼より涙をはらくとぞ流しける、地時に春姫の懐ろより以前の蜥蜴はひ出る、繼母是はと走りより引出して、爾は何ぞ高貞大毒の蜥蜴なり、地なふ憎や腹立や、常々妾を繼母として咒ふ由を聞たれども、神佛正直と色にも出さで有けるに、正しう是は自らにあたへて殺さん企みよな、詞やい己れが母めはな、傾城の男たらしのいき盗人と聞けるが、地流石に筋を現はして、親と名の付妾を殺さんと天命盡、爾是にても高貞自らを疑ふか、地如来の様な自らによふも冤をいひかけしぞ、ア、をそろしい根性やと、たよみかけていひけるは、フッさながら、邪心といひつべし、地春姫涙にくれながら、いやみづ

からは何も知ず、居守也とて兵庫殿の給り、人に隠して生ながら一口に呑めと有し故、懐中せしとあれば兵庫聞も入ず、詞己れが頼みしゆへにこそ捉へつれ、いひ掠む共かなふまじ、口引裂んと飛びかゝるをどこへく、さなかさだかにせられぞ、よしそれは兎も角もかゝる毒蟲一口に呑めとはいかに、呑て苦しからずんば先各々より一口づつ、詞試てまはされよ、さあ一口是非とも爰はしるふんと、地口に突付け指し付れば、顔を擧て逃げまはる、フおかしかりける次第也、地工、今は是迄と兵庫太刀をぬき放し、一打と飛んでかゝる、心得たりと高貞も抜合て渡しあふ、地繼母は杖をふりあげて春姫に打てかゝるを、左手に抱へ右手に背けしは

●しふぶん

強ひること。

しきゝへて、三斬むすぶ、フ老武者なれども、地六郎左衛門早業の達者にて、なぐりたてくいきをもつがせずわたしあふ、地其隙に兵庫が若徒十餘人、餘さじと馳來り高貞を取廻す、身すがら鬪ふ程ならば左右なくも勝へきに、姫君を助けんと肩に打かけ片手打、打たてく落のびてはきりぬけ、さゝへては走りぬけ、拳をならし牙をかみ、防ぎく落て行、地兵庫守勝にのり二三町も追駈しが、詞己れいつく迄遁へき、地此上はあらはれたり左京を追駈人知す討て捨本望は達せんと、他見も忘れ身も忘れ外聞知す勇みける、短慮未練の悪人、詞傍若無人のしれものやと、後ろ指をぞさしにける

●玉水 山城伏見の南奈其海道の傍井出の里の北にある名水なり。

第二

地六郎左衛門高貞漸々に切りぬけ、玉水のあなたなる、  
笈がもとに着しかど老武者の悲さは、風に縮める枯木の  
力も折て十三ヶ所の深手をうけ、かつはと伏しては  
起き上り轉ては立あがり、エ、口惜しと計りにてあた  
りを、睨んでどうどふす、地春姫やがて抱きたて、な  
ふ高貞やれ六郎左衛門、御身が死て自らは誰を便に何  
とせん、心を強くもつてくれよと、様々看病有ければ、  
地今を限りの高貞、ア、無念千萬やな、此上は中々た  
まるべうも候はず、察するに父上様、一兩日は京都  
に御逗留候へし、是よりは道も一筋、とくく都に

●北嵯峨

清涼寺附近をいふ。

上り父上様へ御對面ましまして、若もはや父上様東へ下  
り給ひなば、北嵯峨と申所に靜三と申比丘尼有、是  
は乳房の母様の御めのとにて候へば、かれを尋て頼ま  
せ給へ、エ、世の中に任せぬは人の運、理非も仁義も  
善悪も天道は照し給はぬか、是姫君様御身の母御は  
の、攝州難波津に夕霧と申せし傾城にて、君五才の時  
世を早うせられしぞや、地かの北嵯峨の靜三は其ゆか  
りにて候へば、とくく尋ねおはしませエ、いとをし  
やさこそ流浪し給はん、ア、苦し是迄なり、南無阿彌  
陀佛を最期にて遂に空しく成にけり、姫君驚きやれ高  
貞くと、呼へど叫へど息絶たり、こはいかゞせん悲  
やと、すがり付てぞ泣き給ふ、フシ思ひやられて道理也、



●衣笠山 洛西仁和寺の西にして衣笠内大臣の舊跡なり。

●來迎の三尊 \*

途方に暮て在せしが、又敵もや追かけん一時も早く都に上り、父の見參に入へしと高貞が死骸を草むらにおし隠し、太刀を取て腰にさし貌をし包みにせ男、涙も姿も忍びくくに都の方へと三重急がるよ、フン衣笠山の紅葉ばも、來て見よとてや雄鹿なく、世を遁ても所から我身のさかの竹がこひ、殘秋庵とうつ額は、女筆めきたる庵有、來迎の三尊に故有げなる御影をかけ、櫛霧島立ませで、假名の過去帳しどけなし、フン風があげたる、枝折戸の、そとの閑伽棚傾きて、あすのたよりとつみ捨し、フン嫁菜の露は憎らず、地向ふは千代の古道に、地續きておろす嵐山、野鳥山鳥軒なれて、物のあはれもつくし琴、そむけし壁もあばら

●三界は假の宿 三界は欲界、色界、無色界のことにて苦本と稱す之を超越してはじめて悟道に入るといふ故に三界は假りの宿なり。

●加賀笠 \*

庵、住めば住まると習ひかや、主は比丘尼なりけらし、鉦もかすかに南無阿彌陀、南無阿彌陀く、地かよる折節四十あまりの女房の、翠の髪を刺こぼし、墨の衣に布はゞき、かけし更紗の風呂敷に、色はなけれど匂ひ残りて加賀笠や、旅にしほれし風情にて、庵のとほそ叩きつゝ、フン頼みませんとほのめかす、地あるじの比丘尼鐘木をとめ何事さうといらへける、詞是は行脚の尼にて候、日に行暮て軒もなし一夜の宿をかし給へ、地なふ三界は我とても假の宿、ことに御身も尼衣同じ修行の袖なれば誰を主と定むべき、こなたへ入せ給へとて、チクリ庵の、内へぞフン請じける、地旅の比丘尼先佛前を伏し拜み、詞扱も今宵はお宿と申、念佛し

てあかさんと御嬉しきは限なし、何故の御遁世かは知らねども、心にかゝる事もなく物静成る御住居、お浦山しや、して先御名は何と申といへば、主涙ぐみたる風情にて、さん候自らは静三と申候、心にかゝる事なしとよそめには見ゆれども、なき面影はかき曇る、袖の時雨の泪川、歸らぬ昔懐しや、地して又旅の尼ごぜはいか成る故の御發心、御名は何とか申やらん、  
 自らは知貞と申候、何故の遁世と御尋にあづかるも、耻かしや淺ましや、罪を滅す種なれば、懺悔物語申べし、たまく人界に生をうけながら、士農工商の家に生れず、又は琴碁書畫を事とする身にもあらず、あるが中にも川竹の遊女は何の報ひぞや、それさへある

に自らが、古のしわざは、憂き流れよりやり水の、  
 遺手のなれの果さふらふ、此身のつらさは女郎より猶憂きものとは人知じ、長地げに好色の世の中に、誰身のうへも戀衣、いとしい事と知ながら、身の役なれば君達を、さがなくせいてあはせねば、フシ木竹の様に、いひなされ、心の外の罪つくる勤め、フシ淋しき、夕まぐれ、是も遺手の咎ぞとて、内の夫婦の鬼貌は、フシ呵嘖の責より猶つらく、此地世の地獄の情なや、遺手に種はなき物を、怨より外は知ぬとて、人に疎まれ悪まるゝ、こはそも何の因果ぞや、禿は子よりも大切に、いとしさに打析檻を、稚心のいはけなく、地恨しと思ふ其一念、そもやいづくへゆくべきぞ、又或時は有明

●安語戒

虚言をいふこと五戒の

の、月の夜床も更ぬれば、雪のあさこみ遅しとて、揚屋の恨み心せき、口説の首尾をつとむれば、振れし人に詫詞、夕の座敷の初対面、今日の貰ひを、フシいなをす、心は千萬、身は一つ、珠數取隙も、脱經あらばこそ、日に幾度か偽りを皆身の、咎とは知ながら、いはでかなはぬ、此ならひ、フシ忘語戒は破れたり、月とも日とも樂みし、都に其名高安や、河内様に別れまし、もはや憂世も是迄と、菩提の道におもむきし淺ましとも悲とも、つらしともものうしとも、此身ならずば人しらじとさめぐとぞ泣るたり、地主の静三聞入て、とかうのいらへはあらばこそ、フシ共に消入る計り也、地や、あつて涙ををさへ、詞なふ御物語は我身のうへ、

●夕霧 大阪新町扇屋夕霧のこと。こゝに二十二歳の夕嵐といへば、夕霧死する時二十二歳なり。

同じ流れの蘆分船、難波入江に名もたつや、夕霧様と申せし、地色と情のみななみ戀に消へさせ給ひつる、あはれの秋のゆかりの露、玉といへる遣手也、地おしや戀しや霧様の、まだ新造のはつねお床を取そめて、片時も離れ参らせず廿二才の夕嵐、ねぶれる花の御めにて我等が顔を見給ひて、死出の山路は歸らぬ旅、玉やさらばと宣ひしが、フシ是が別れで有しぞや、其面影のひしくと、身をも離す懐かしく、繪に寫して御回向を申せども、物いはず笑はず忘るゝ隙もなき中に、只今の物語昔が思ひ出さるゝ、あら戀しの霧様やと、フシ聲をあげてぞなげきける、地知貞も共の涙ながら、夕霧様の御事は、都迄もかくれなく見ぬ人迄も慕ひしに、

さこそ御身の御心底察しやられていたはしく、調扱里  
 方の御ゆかり又深き殿御などはなかりしか、さればこ  
 そ果報つたなくおはしまし、全盛の最中にふたりの親  
 はうせ給ふ、深い殿も有しかど互の戀にてあひ給ふ、  
 奈良の左京様と申せし御方と命かけたる中なりし、此  
 左京様には髪さへ三度切給ふ、此事故に我等共半年計  
 り中わろく、ふすべられ参らせし、思へば是も、フシ涙  
 のたね、地今は形見で候よ、夢の中戸の假枕籠がもと  
 のうつゝねに、十八の霜月娘御ひとり生み給ふ、調わ  
 らはひとり介抱にてつゐに人にも知せず左京様へ渡  
 せし也、地今年はもはや十三のはづなるが、息災にて  
 ましまさばせめては霧様を見ると思ひて、一目見たふ

●玉翠

琴を美賞したる調。

候也、地容貌といひ心だて百人千人にも、類なき女郎  
 のせめて一日半日も、曲輪のしのぎをまぬかれず、な  
 き人となし参らせ、有甲斐もなき我々が今の長命何事  
 ぞと、語りもあへず聲をあけ、フシはしたへいりなげ  
 きける、げにことはりや道理やと、我身の上人の上、  
 思ひあはせいひくらべ、フシ共に袖をぞしぼらるゝ、  
 調なふ又是に候玉翠は、常に御手馴し定紋の桐のとう、  
 つゐによるせは有てふものと手づから蒔繪にかゝせ給  
 ひしを、地忘れ形見に持たれども、琴にも心あればこ  
 そ、主をしたふかねをとめて、弾けども聲の出ざれど  
 もせめて昔を思ひ出と、涙のひざに引のせてかきなら  
 せども此琴の、聲も響もなかりけり、歌扱もいのちは

● 上嵯峨、下嵯峨、大桑、常盤、廣澤、愛宕等の別れ道なり。帷子辻といふは、櫻林壘後の骸骨嶽野に捨し時、帷子の落散りし所なりと。  
 ● 風緑野に收つて云々 詩句の山所詳ならず。諸曲、檜垣に、あられ有難の巾ひやな、風緑野に收つて煙條直し、雲岸頭に定つて月桂圓かなりしなどを取りしにや。煙條は柳の籠みわたれるさま。月桂はたゞ月といはんばかりなり。  
 ● 大井川 北丹波より流れ、水尾川、瀧瀬川に落ち、猿飛龍門、大津等の名ありて風山の麓を過ぎ、下流は桂川と稱す。

ナ有、ものと、地うたひ給ひし寐覺の調子、耳にとゞまり今聞やうに思はるゝと、琴の上に伏しまろび泣より外の事はなし、地かくて左京進二三日が其中は、都に逗留せられしが、嵯峨の奥に靜三が住と計り聞傳へ、難波の秋の面影を今宵の月に語らんと、供人少々召くしてつまなしがらすうかれ出て、かたびらが辻過行ば、風緑野に收まつて煙條直し、雲岸頭に定まつて月桂圓かなり、いとゞかなしき、大井川、流泉の曲になぞらへて寒竹の一節切、戀衣といふ手をばをし返してぞ三重ふかれける、二人の比丘尼、是を聞あればかの戀衣、誰人の吹やらん、戀ふかき音色やと、思はず琴を又引寄せ一節切に合すれば、不思議や此琴音を出

● 夕あしたの 相の山の唱歌なり。

し、泣がごとく慕が如く聲にひかれて、三重くる鹿のフシ妻待すがたぞ、やさしけれ、歌夕あしたの、薄霧も消て、歸らぬ死出の山、わかれて、のちの、友とては、袖に残りし、うき涙起請、ひとつに、フシ文ひとつ、あす知ぬ、合手狩場の鹿の、いのちさへ、戀に捨なばおしからじ、地調子もしなも音色も自から、調へ合せし如くにて、しばし憂をぞ、三重わすれける、フシ靜三おもてに、地立出よく見れば見し人也、なふ京様かおことはたそ、ながらへつらき玉の緒の玉よといふもうつゝにて、あつと計りに寄継りや、消なんと泣々も、庵には入れれども互に夢かたとどられて、フシ涙の、外は詞なし、地左京仰けるは、詞某此度公用に付關東へ

下る也、地ながき東の旅の道せめておことが貌を見て  
 太夫に逢し心せんと、扱こそ尋來りたれ、十年あまり  
 も見ぬ内にさのみは年もよらざりし、只何事も昔ぞと  
 涙と共に仰ける、地靜三もこしかたの物語、形見の琴  
 の音をとめて有つるに、今かた様の尺八に聲を合せし  
 不思議さに、いとゞしく太夫様に逢參らする心地ぞと、  
 しげくと打眺め又涙にぞ暮にける、地かゝる所へ春  
 姫はやうく尋ね庵に入り、靜三と申尼ごせはこ  
 なたなるかといふ聲に、地左京進驚き是はく何とし  
 て來りしぞ、いかにくと有ければ、地姫君兵庫繼母  
 が悪事を委く語り、六郎左衛門高貞は深手を負ひ相果  
 すと宣へば、はつと驚き仰天し、扱心底を見損ぜし、

此上は穩便ならず、先引返し思案せんと齒がみを、な  
 らして居られける、地何として聞付けん、兵庫守廣忠  
 手の者二三十召くしこよよしこよともとめ來り、庵  
 の扉わるゝ計りに打叩き、地此庵室に左京進盛光やあ  
 る、大事の公用を承り其身を不淨に持と云ひ、京都に  
 逗留し様々の樂遊び叡聞に達し、逆鱗大かたならず切  
 腹せさせよとの勅諭也、速に腹切れよとぞわめきける、  
 左京聞もあへずからくと笑ひ、やい畜生め、をのれ  
 が身の不義あらはれし身のあつさのがれがたく、勅諭  
 と偽り某を失はんとや、チ、しらくしき謀めがきと  
 いひ家來の敵、地世界の悪魔を拂はんと刀を抜てかけ  
 出給へば、小六をはじめはかくしくはあらねども、

小者中間十余人庵室の藪垣を、あなたへおつつめこな  
 たへ返し火をちらしてぞ、三重きり合ける、フシ鷹とヒ鷹  
 との、地はげみなれども、味方は無勢にあし弱多く、  
 月夜かけの大井川案内もしら波に、おつたてられて左  
 京の下人悉討るれば、二人の尼はをそれつゝ、フシ行方  
 もなく落てゆく、地小六は姫をかくまへながら、主人  
 の命を助けんと、立へだてさゝへける、調左京は姫を  
 助けんと小六が先に立ふさがる、地主人が進めば下人  
 が續き、下人が進めば主人がつゞき、一二三度四五度追  
 立しが、少もたまぬ大勢なれば左京進聲をたて、や  
 れ小六姫を頼むぞ連てのけ、やれ狼狽たか姫を連て一  
 足ものけやくとよばはり給へば、地無念ながらも小

●松尾山  
當る。

葛野郡、嵐山より南に

●心の花も冬籠る、「難波津に咲や  
此花冬籠るを春へと咲くや此花」  
難波に縁ある此の歌を引いて春姫  
を出し來れり。

六郎春姫をかき負て、松尾山にさしかゝり、フシ津の國  
 路へぞ逃のびける、地左京も今は心やすし犬死よしな  
 し一先と、二つ三つ打合せ四方へばつと追つ散し、  
地山とも谷とも嫌ひなく月の朧に立かくれ、丹波路さ  
 して落給ふかの、盛光の御有様、調いと危しけなげな  
 り、心心地よしとも中々申す、計りはなかりけり

第三

地心の花も冬籠るいたはしや春姫は、望月小六に誘れ  
 危き命は助かれども、父の左京の行方知ず、フシ尋ねめ  
 ぐるぞあはれなる、地幸ひよき折柄なれば、母夕霧の  
 なきあと成共見ばやとて、難波の秋の西横堀水行川の

●橋を四つ 四ッ橋のこと。

●格子く 女郎屋の格子なり。一軒くに尋ねるをいふ。

●家の名の扇の風 扇屋のこと。此の所あからさまにいへば、當世となりて時代が古く見えぬより、新町の名も隠し、凡て城曲に書きたり。

●ひつきき髪 二つをり云々。以下太夫道中の状を寫したるなり。

●萩野 夕霧在世の時、引舟などに使ひし女郎なるべし。

●袖から渡す云々 禿などが太夫の文を客に渡すことなり。一むすびは結び文をいふ。

●五大力 遊女より客へ通る文の封じめに五大力と書く。ひとり遊女のみにあらずと見え、[世俗の文書封に五大力菩薩と書て

くもでなれば、橋を四つわたせるも戀を通す天川、流れの、フシ一里に入れば、地げにや我はよき露の名残と思はれて、格子くを見渡せばこそ母上も、かくやわたらせ給ふらん、爰の程にや有つらんと、あなたこなたに立やすらひ涙ぐみたる風情也、地げにや家の名の扇の風に消へうせし、霧の夕を訪れて、萩野に残す昔かや、ひつきき髪を二つをりまた二つ櫛しどもなく、勿體こぼす道中に、フシ雪のすあしの花踏や、フシ禿がもたる硯箱、世界の戀のやどり也、袖からわたす一むすび片假名のより五大力、いよしとまではほの見ゆる、よしやよしだに行違ひ、なふ、聞今のからことづての、地ござんしたぞとほのめけばよい様に

●けふの佛 此の日夕霧の命日記り。

道園に遺す事いかなる故有やと曰、按るに釋家五大力を以て道祖神に習合する事あり、南都般若寺より出る五大力符草に習ひ起るや書封の封に書くと云々、五大力菩薩は金剛吼、龍王吼、無畏方吼、雷電吼、無量力吼をいふ。いよしはいよしごげんなどの文句をいふ。

へといひ流す、フシ詞のはしもくどからず、地春姫是らを見るからに、母もかくやと身にぞしむ萩野も姫のかほばせを、ちよつと見しが立どまり、ふり返り打守り、扱も似たりと計りにて涙は襟にこぼれけり、地女郎達立とまり、聞あの娘を見て涙の體は心得ず、なふなせにへと有ければさればいな、あれなるは町の娘と見へたるが、地けふの佛に似たはいなと、目をも離さず打ながめ、フシ又さめくとぞ泣給ふ、地女郎達扱はあの子が夕霧様に似たるとや、チ、目もとなら口もとなら見たくはあれよと有ければ、地あたりの格子局みせ、つるに見もせぬ禿遣手に至る迄袖を、しぼらぬものはなし、聞萩野たへ乗走り寄、申しくとよびかくる小



●九年以前の正月六日、此の淨る  
り良享三年の作なれば、九年以前

六郎立返り、こなたの事か何事といふ、地荻野人目も  
憚す春姫の手を取て、詞近比粗忽な事なれども、此お  
子はどなたのお娘候ぞ、地よく似た人の候ゆへ心なら  
ずも尋えし候と、いひもはてぬに春姫わらはが母は此  
曲輪にて、夕霧様と申せし人、扱はてよこは左京様か、  
中々の事、是は誠か夢なるかと、荻野の君を初歌仙山  
の井其外有あふ女郎達すがり付、人目も、はちずな  
げかるよ、地やよあつて涙をとゞめ申しわたしはな、  
詞荻野と申して御かた様の母様の妹ぶんにて候、地幼  
きより御苦勞にさなれしゆへ今此身とは成り候、其時  
はさも思はず今に成て姉女郎の恩愛親よりも猶深し、  
日を數へ手を折れば九年以前の正月六日、しかも今日

●花岳芳春、夕露の成名、大阪下  
寺町淨國寺に墓あり。  
は恰も延享六年に當り、夕露が歿  
年なり。此の年新町麻屋にて夕露  
の追善など行ひしを此の淨るりに  
作りしもの。

は御命日、下寺町の淨國寺に花の形をやりまして、お  
名はあられぬ花岳芳春様と申候、勤の身の悲さは門よ  
り外は出入かなはず、御墓へも參られず御恩を報ぜん  
様もなし、不思議の縁つきせすも只今御見に入る事太  
夫様を見る如く、昔戀しや太夫様懷しや、どれ紙こせ  
と引ちらす、のへも亂れて雨とふる、フシ涙いとなき、  
風情なり、地春姫も涙にくれ只母様を見る如くと、荻  
野の膝にひれ伏して、むせかへらせ給ひしは、フシ目も  
あて、られぬけしき也、地やよあつて涙をどめ常々人  
が申せしは、みづからは誠すくなき傾城の子とて笑ひ  
しを、腹立て候が誠は母は偽り人、御最期の折から父  
うへの御方へ、何とて便はなかりしぞや、お心も變り

●傾城に誠なし……つらやじよさい  
 ●と恨むらん　これは萩野の戀物  
 引けて、寶永八年作「冥途飛脚」に

しと又袂をぞしぼらるゝ、地萩野聞給ひ、御恨は尤か  
 し、傾城に誠なしと世の人の申せども、其は皆ひがこ  
 と譯知ずの詞ぞや、誠もうそもも一つ、地たとへ  
 ば命なげうちいかに誠を盡しても、男の方より便なく  
 遠ざかる其時は、心やたけに思ひてもかうした身なれ  
 はまゝならず、おのづから思はぬ花の根引きにあひ、  
 懸し誓ひもうそとなる、又初より偽の勤計にあふ人も、  
 絶ずかさぬる色衣つゐのよるべとなる時は、初のうそ  
 もみな誠、とかく只戀路には偽りもなく誠もなし、  
 フン縁の有のが誠ぞや、地あふ事かなはぬ男をば思ひ  
 くて思ひがつもり、思ひざめにもさむるもの、つら  
 やじよさいと恨むらん、詞ア、よしなの戀物語、今日

●身あがり　身あがりは祝の佛事  
 を營む時などに、女郎揚代を自辨  
 して休業することなり。然るに後  
 々佛事などを口實として情夫狂ひ  
 の爲に身あがりするもの多く、借  
 金の層むばかりなれば、廓にては  
 之を禁じたる事もあり、然らずと  
 も容易には許さず、されど許さずと  
 叶はざる場合もあれば、全く禁止  
 することも出来難し。昔し八千代  
 といふ名妓は、東寺の御影供と稻  
 荷祭には男の禁約をせず、身あが  
 りして神佛祭りしたりとて「色道  
 大鑑」にいたく褒めたり。

●奥の書院　扇屋の書院なり。

●しやうごん　莊殿にて器具調度  
 など美麗嚴格に整頓すること。

●細波の祖師　雅波御堂は慶長年  
 中の草創にて親鸞聖人より十一世  
 顯如上人の法孫教如上人の開基な  
 れば、教如自筆の名號なるべし。

●探幽　狩野派中興の祖なること  
 人の知る所なり。延寶二年十月七  
 十三歳にて歿し、此の作より僅に  
 四十年前なり。有名なる畫人なれば、  
 其の名を用ひしなるべし。

●恵心佛　大和國葛木郡の人、父

の御命日心計りの手向の露、揚屋と申所にてきのふよ  
 り身あがりし、ぼん様よびまし越後町の扇がもとにて  
 一夜別時の念佛申候、地いざくあれへ連れませんと  
 春姫の手を引て、あまたの女郎小六郎、越後町へぞ  
 三垂、ともなひける、フシうつせばうつる、地極樂や奥の  
 書院を佛間と定め、違棚をしやうごんし、難波の祖師  
 の名號探幽の觀世音、扱中尊は恵心佛、フシ四季の草木  
 の造花、地名香のきに薫ずれば今朝の三味線廿五の、  
 菩薩の歌かとうたがはる、玉の位牌を一段たかく、フシ  
 色を深めて備へたり、地春姫焼香し給へばあまたの遊  
 君入かはり、みな水晶や珊瑚珠の數珠次第く、の焼香  
 は此世、チクリ、から成る、フシ佛也、フシ兼て期したる、

は下部政親、母は清原氏、高尾寺  
観音に祈り光明なる玉を授けると  
夢みて孕み悪心を産む、悪心七歳  
にして父死す、依て比叡山に登り、  
慈惠大僧正の弟子となり、十三歳  
にして出家す、後一條帝の寛仁元  
年七十六にして歿す、毎に彌陀來  
迎の畫及び彌陀の像を彫刻するに  
慈惠眞實の佛相形表に顯れて有名  
なり、悪心佛は悪心僧都の作佛を  
いふ。

●廿五の菩薩 二十五菩薩とは觀  
世音、勢至、藥王、藥上、普賢、  
陀羅尼、法自在王、白象王、虚空  
藏、德藏、寶藏、金藏、光明王、  
山海志、金剛、華嚴、日照王、衆  
寶王、月光王、三昧、獅子吼、大  
威徳、定自在王、大自在王、無邊  
身菩薩等にして佛果を得たるもの  
は、二十五菩薩の來迎を受くるも  
云ふ。

●黒格子の梓巫女 \*

●三瀬川 三途川のこと。

●六道四生 \*

●釋迦の子 \*

●村雨の露も三々 露といはん爲  
に寂蓮法師の「村雨の露もまだい

地事なれば、黒格子の梓神子、參られたりと申ける、

それこなたへと案内し、佛前にこそ通しけれ、地あ

またの女郎座を占て人々なりを静めける、扱春姫は水

手向物になれたる夏衣、とひ手に成てさし向へば、神

子はじゆす引梓弓、神おろしこそあはれなれ、抑地清

淨と申は、地神の清め、内外清淨と申は、此家の悪魔

降伏の清め、天清淨と申は今なき玉を三瀬川、フシ六道

四生の清めとかや、忝くはましませど、釋迦の子みこ

が梓に引れ、フシ今の手向の嬉しさに、より人や、よりく

るや、地よりきたになふ昔語らん、調梓の弓によりく

る人は、水むけがためにはたれ人成ぞ覺束なし、神子調た

れとはつらし村雨の露もまだひぬ槓のとよなふ、げに

ぬ横の葉に、露立ちのぼる秋の夕  
暮を引けるのみ。

●川中には立ども人中にはたれず  
世渡りの難きを戒めたる時、

●三十二相 \*

●氷の地獄 八寒地獄のうち。

扱は秋の夕に立のぼる、霧様にてましますな、尋申さ

ん語り給へや、ア、語るもつらし問もうじ、因果の車

めぐり来て、フシ遊女の身とは生れしぞ、親里を振捨扇

のかげに宮仕、ゆん手も他人右手も他人、川中には立

ども人中にはたれずと、申たとへの候ぞや、形は三

十二相をもちたれども、あなたへ參れば色も情も仇と

なり、思ふ男にまぶくるひ、いやな男をふりふる雪の、

氷の地獄にとちらるゝ、娑婆の榮華は罪業のたね、夜

酒朝酒つけざしが、調熱湯と成て身を焦す、三味線は

呵嘖のほこ、仕舞ひ太鼓は修羅道の、フシ時の太鼓と響

くぞや、地髪を切たる咎ぞとて、干反畑の草の根を一

夜に堀れと責めらるゝ、たとへば親の産み付し指切り

●牛頭馬頭 地獄に在りといふ鬼の名。  
 ●阿防羅刹 地獄の苛責を蒙る鬼牛頭人首にして兩脚は牛蹄をなし力強大にして山を排し剛鐵劍を持つといへり。  
 ●血の池 血の池地獄のこと。

爪を放せば、其指かへせ爪かへせと、牛頭馬頭の阿防羅刹責めさいなむは悲しやなふ、血文血判の咎ぞとて百由旬の血の池を、鐵のかいげにて汲ほせと責らるゝ、汲ども盡せず汲どもかはらずあとよりふりくる、血の涙、かはく隙なき袖のうらめし、恨みても今はかへらじ、跡弔ひて參らせん、心に残る事あらばなをしも梓により給へ、地ヲ、心に残るは鴛鴦のあひの枕の我夫よ、命かけ神かけて此戀計りは仇になさじと、憂をも凌ぎましたるに遠山鳥と隔りて、人にまかせしまゝならぬ、往生の折柄は目もくらみ胸も塞り、只御事のみ懐かしう御手づから末期の水をうけ申さば、たとへ三途に迷ふとも戀故也と悔はあらじ、あはれ扱一日も

●娑婆てんくわう 群ならず。

勤め苦限を免がれず、曲輪の露と消たよなふ、からの鏡の我子をば傾城の娘とて人にわらはせ給ふなとよ、扇のかげや庭寶妹女郎朋輩衆、からの鏡を鴛鴦のあひの枕にわたしてたべ、ア、戀しきはあひの枕いとしきはからの鏡、血を分ねども妹と、うへし軒ばの萩野うは風そよさらば、今日の回向の嬉しさに娑婆てんくわうのさかいは、戀も無常もなかりけり戀しゆかしは迷ひのはじめ、逢た見たさは輪回の業、死出の旅路は杖にも笠にも南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀、冥途の使ひしげれば、最早歸ると云すてゝよりくる魂はなかりけり、春姫小六萩野の君、其外ゆかりの女郎達、物のわけなき禿迄一度にわつと聲をあげ、フッし

たひなげくぞあはれなる、さながら、フシ親子の如くなり、地かくて春姫仰けるは、自らこそは母なるに皆様は他人の身の、かやうに弔ひ給ふ事有難し忝なし、草のかけにてさこそ悦び成佛疑ひ候まじ、調つては我等も墓へ詣で回向いたし、それより父の行方を尋めぐりあひ候はゞ、又こそ参皆様の、御くらうに成候はんとおとなしう宣へば、地ともかくには候へども、今更別れ参らせん事一しほ氣の毒とや申べき、若し左京様にめぐりあはせ給ひなば、皆々ゆかしう思ふよし御傳へ候て、必ず連まして御立寄候へ、やがてくと人々は門迄をくり出らるゝ、姫も名残は盡せねど、見をくりく涙と共に御墓にまふで 三糸へ給ひけり フシか

●延寶六年正月六日 夕霧の夜せし日。これまで王御めかして書き來り、これに延寶六年といふは時代相應せず、但し當時の作の辻褃の合はざる事此の一事によりても知るべし。

●天王寺の六時の鐘 天王寺の鐘は六時堂の前にあるより、六時の鐘は六時堂の前の鐘の義にて、やがて天王寺の鐘といふ事なり。徒然草に「何事も邊土はいやくしくたくなれども天王寺の鐘のみ都にはちすといへば、天王寺の鐘人の申侍しは、當寺の鐘はよく圖をしらへあはせてもの、音のめでたくとのほり侍る事外よりしす

くて春姫、地主従は亡母の御墓へまゐらんと、下寺町と名に聞や、爰ぞ往生安樂の 淨國寺にこそつき給ふ、地日は西海に沈みけり、桶に關伽汲戒名知るべに尋れば、文字も苔むし花岳芳春信女、延寶六年正月六日と讀みも終ず涙にくれ、花參らせて水そよぎ、此土の下にこそ、見ぬ母やおはすらん幻にだに姿を見せ、我子か母かと言の詞をかけて此思ひ、はらし給へ母上と、フシ呼べど、さけへと其かひも、なくく回向し給へば四天王寺の六時の鐘、初夜を知せて更にけり、いかに小六郎、今宵は此寺の軒に通夜申、母上様へ心計りの奉公し明けなば又父上を、尋んと有ければともかくもあそばせと、上着をぬいでしきだへに卒塔婆

ぐれたり、故は太子の御時の園  
今侍るをばつせとす、いはゆる  
六時堂の前の鐘なり、其聲黃鐘調  
のこもれるなり、寒暄に従がひて  
あがりさがりあるべきゆへにより  
二月涅槃會より聖靈曾までの中  
子を指南とす秘藏の事なり、此一調  
子をもちていづれの聲をもとむ  
へ侍るやと申きおよそ鐘の聲は黃  
鐘調なるべし、これ無常の調子祇  
園精舎の無常鐘の聲なり。

●氷は水より出て水よりも寒し  
荷子の勸學篇に「學は以て已むべ  
からず、背は藍より出て藍よりも  
青し、氷は水之をなして而して氷  
よりも寒し」、即ち弟子の師匠にも  
勝りたる時などの譬なり、但し此  
の所さる意解なし。

●閻浮 閻浮提の界。即ち此の世  
界のこと。閻浮戀しやといへ此婆  
婆が戀ひしとなり。

枕のうたゝねは、あはれにも又 三重 物すこしされば  
氷は、地水より出て水よりも寒く、青き事藍より出て  
藍より深し、もとのうき身の報ならば、今の苦みさり  
もせて、あら人戀し閻浮戀しや、地我こそ御身の母夕  
霧よ、我世に在し古ためしすくなき遊君の流の女と成、  
多くの寶を費し色に染み香にめでて、情に溺れ人を迷  
はず、結びかへ解きかへよなくごとの下ひもも、  
フシ心をくだかぬ夜はもなし、地肌ふれし男の數二千  
三百卅人、それが中にも我故に命を捨て身を捨しは、  
八百七十六人也、其煩惱の邪淫のほむら猛火と成て此  
身を焼く、苦みの隙はなけれ共、種蒔き捨し撫子の花  
の貌ばせ見まほしく、是迄は來りたり、罪を助けてる

●異類異形 鬼などの人と異なり  
たる形相のもの。

させよと、さめくくとぞ泣給ふ、地時に山鳴り谷應へ  
大地八角にさつと裂け、百連のほのほ虚空に耀き、地  
異類異形の男の形、其執着の眼は青く、戀に焦れて見  
えたるはフシ身の毛も、よだつてをそろしよ、地或は  
主君の不興をうけ、太刀をもすてよものよふよ、もの  
よあはれにおちぶれて非人と成し形もあり、親の勸當  
敷しらず、又はちこなる法師なる、老の名たつも戀ゆ  
へに妻子を捨しものもあり、家業をわすれ榮華にふけ  
り、月にもゆく闇にもゆく、雨の夜も風の夜も 地身  
を苦しめしその報ひ、汝が色汝を責我思ひ我を責む、  
思ひ知らずや思ひ知れ、恨めしの心やあら恨めしの姿や  
と、一度にばつとりまはず、なふ悲やと逃げ迷ふ、

● 劍の山

前は劍後は火焰右も左も怨念の、地邪淫のあつきは身を責て劍の山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀のぼれば劍は身をとし磐石は骨を摧く、こはそもいかにをそろじや、ゆるし給へと手を合せたどりのぼるぞ、フシあはれなる、地玉の姿は、寸々に切れてあへなき戀の山、邪淫の鬼は一同に、フシ猛火に、こがれて失にけり、峯に残れる夢人の、悲しむ聲もよはくと、親子の名残是迄ぞさらばくといふ聲計り、山と見えしは秋の野やあだしがはらに、夕霧の、棚引空やほのくと、フシ夜は面影に明にけり、春姫夢覺めかつばとおき、なふ母上様母上と抱きつけばたか卒塔婆、縋りつけば古き墳しるしの石はいたづらに、蟲の聲のみり

● 淺茅生  
生ひたる形、あさぢふは茅花の疎に松洞の如く用ゆ、こは尾花にかけたるなり。

● 有磯の濱  
有磯の海は越中射水郡にあり、濱はその海濱をいふなるべし。されど春姫の母なき事を友なし千鳥に譬へ、その千鳥に縁を求めたるまでなり。

んくたり、扱は夢かや夢成か、現に成共御姿今一度見せ給へ、なふ母様それは餘りにつれなやと、フシ聲を上てくどかる、地小六も共に涙ながら、前日たけなば人や見ん此世にまします父上の、御行方を尋んと或は諫め或は怒り漸すかしまゐらせて、納戸の方へ行あとの、風ばうくたる淺茅生の、尾花も我を招くかと、吹返しては吹もどし、行かふ人の袖濡す、心をよせし墓所、戀も情も色も香もあはれも、共にかさねたる

第四 春姫道行

フシ世の中のまゝに成ぬは、誰身にも、有磯の濱の友なし千鳥、母なきそでの悲きに、父をぞ戀の、フシ大和

●山鳥の尾の「足曳の山鳥の尾のしだりなの古歌なとれり。」

●戀慕の闇に云々 例の祭文なり、戀慕の闇のくらがりを取つて關上山の山頂にて大和河内の國境にて平群へかゝる所なり。

●さいれ さいれ石の界。さいれは小石なり。  
●金剛山 葛城山と同じく河内と大和の國境にある山。

路や、山鳥の尾のしだり尾の、をのが様々別れゆく、  
チクリ 憂世の習ひぞ、定めなき フシあはれと思へそでざ  
くら、知人にせん花ごろも、だての花がさ引かへて、  
繩のしめをの フシ男笠、ふりかへりみる西の海、ア、  
貌になあてそゆふづくひ フシあとには梅のなみくもる、  
フシ難波のなごり、思ふには、戀ゆへ失てなき母の、戀慕  
の闇に迷ふやと、關上峠なもつらし、見晴す空の山々  
も、胸に思ひのやへ霧籠て、フシゆかりの雲ぞたちのぼ  
る、あれく岩にも松は生ものを、露やどすべき草も  
なく、小チクリさぐれ、小砂の金剛山、いかにつれなき山  
心なせにつれなき、心なるらん、よしや人には、つら  
くとも、おもかげの風わけの雨ふれや、ふれくさつ

●ふるや小袖がぬれるふ 其の頃の流行歌。

●高安 河内國高安郡。昔し在原業平忍び女出来て高安に通ひ始めしが、妻なる人少しも妬む心なく毎夜快よく出しやりければ、業平却て我妻に仇し男などのあるにやと疑ひ、一夜高安に赴きたる風をして前綫に隠れて様子を観ふに、女はいとよく化粧して打ながめ、「風吹けば津津白浪龍田山、夜には君がひとりゆくらん」と詠じ、夫の身の上を案じければ、さすがの業平も悲しく思ひて、これより河内通ひなとまりたりと「伊勢物語」にあり。二挺の弓は女が二人の男に見ゆる場合に多く用ゆれど、必ずしも女に限らず、こゝは業平が二心のありしなふ。

●龍田山 大和國平群郡にあり、龍田の社、又傍らに龍田川あり。これも業平の故事「伊勢物語」に、昔男の龍田川の頭にて詠みしとい

とふれく、 歌降るや小褌がぬれてゑ、ちるかまさき  
の葛城山、よる通へとの フシしるべなり、地こゝは古  
業平の、思ひと戀と兩國にさよぶね流す河内路や、浪  
のよるく、高安に、フシ人目しのぶの色好み、その通  
ひ路もしげどうの、二挺の弓の、引手あだなるしのび  
ねに、浮名やはつと立田山、神代もきかずと詠じけん、  
からくれなるのにしきがは、チクリわたらば、中や當麻  
山、佛法最初の法隆寺、チクリ寂滅、爲樂の鐘の聲あか  
ぬ別の、フシとりはものかは、それはなさけの恨のたね、  
これは無常ひゞきと知ど、しばし、迷ひの人ごころ、  
話女姿と三輪の神、其をだまきを繰かへし、戀しき人  
のもすそにつけて、小チクリ死出の山路のあとを慕はん、



ふ歌「千早振神代も開かず龍田川  
錦紅に水くるとは」を引き、な  
り。

●富麻山 富麻の受陀羅寺とて中  
將姫の古跡なり。大和葛下郡に屬  
す。

●法隆寺 聖徳太子の建立なれば  
佛法最初とはいへり。  
●あつわわかれの云々 待嘗の侍  
従を見よ。

●女姿と三輪神 謡曲「三輪に、  
「暫し迷ひの人心や、女姿と三輪の  
神」とあるを取れり。戀しき人の愛  
につけては、「落事本記」に、大己  
貴神偏く妾を求大陶祇之女活玉依  
姫に通じ女孕めりあり、父母性み  
其の誰人なるかを問ふ、女曰く  
神人毎夜屋上に來りて枕を双ぶと  
即ち女を針を穿玉巻につけて  
神人の愛に懸け、明日日其の糸の  
行先を尋れしに、遂に三輪山即ち  
三輪に留るといふ。こゝには縁な  
きし「妹背山」のお三輪はこの故事  
を作りしなり。

●辰の市 派上郡にあり。  
●十市 十市郡。

●古河野邊 城上郡にあり。昔こ  
ゝに二本の古杉あり。古今其の他

ものじやあれ〜〜三界的衆生のための親なるや、  
大佛殿もあり〜と飛火の野邊の夕雉子をよぶ、聲  
のそれならば、われ諸共に導きて、玉の臺に法の花法  
華寺にこそ 三重つかれけれ、フシ年月くるよに、地從  
ひて靜三知貞二人の尼、佛法修行の功つもあり、なき君  
達の一生の、贈返し玉章を悉取あつめ、宿も定め  
ぬ文車 諸國をめぐるぞ殊勝なる、地程なく南都に  
成しかば、町々にて聲をあげ、詞是は津の國難波にて、  
名にしおふ遊君の文玉章にて候、地されば文書に色を  
ふくみ、煩惱のなかだち罪業の重きを悲み、吉野の奥  
の土中に埋み、玉章塚と名付壹丈八尺の卒塔婆を建て、  
詞一字をしつらひ不斷念佛をはじめ申、一紙半錢の奉

の歌集に、此の杉を誅したる歌あ  
りて有名なり。但し其の杉は古河  
野邊には無く、初瀬川の川上にあ  
る由を「和州舊跡幽考」に記せり。

●姿池 鏡の池に映る姿といふこ  
とにや、詳ならず。

●飛火の雉子 飛火の野邊に燒野  
の雉子の子を思ふといふ事なかけ  
たり。  
●法華寺 今其の跡詳ならず。

慕ひ行ばや、フシ駒を早めて沓、掛のフシ宿過行けば、  
辰の市、十市のをのゝ初時雨、古河野邊の神杉よ、す  
ぎし、フシむかしの、春を語らん、フシきくやいかに、我  
身ながらも我親に、ア、にたりと聞けば、フシ形見ぞと、  
髪ゆひふりなりふりそでも、姿の池の水鏡、歌どれ  
く、それ見て、見てから〜〜みてから〜、からりこ  
ろ〜から〜ころも、きつ〜なれつ〜きら〜さか、故郷  
も近く奈良坂や、櫛の葉かげもめづらしく、しばしや  
すらふよすがなり、フシ大和山城、津の國の難波の三津  
のうらく〜や、都〜を廻りても、フシ心の外の旅ねに  
は、何の名所も見ずしらす、見ずともよしやく〜よの  
芳野初瀬の、花よりも紅葉よりも、戀しき母が見たい

●摩訶般若波羅密 梵語にて摩訶は大多と勝との三義を含み、般若は實相の眞理、觀照の妙智、文字の支益を具する智慧のこと。波羅密は譯して到彼岸といふ。華嚴阿含、方等、般若、涅槃は經文の名。即ち釋迦一代の說法八萬四千の内なり。

●無佛世界 釋迦滅後、彌勒出世に至るまでの間をいふ。

●蒼頡 黃帝の時鳥の足跡を見て、はじめて文字を作りしといふ人。

●妙諦 妙は不思議、諦は眞實にして虚偽なきこと。即ち文字には一字一に佛の眞理が含まれてあるとの義。

●十二因縁 過去に業を作りて現在の苦報を受け、現在に造る業また未來の苦果を招く、衆生輪廻の相を示す名目なり。即ち無明、行、識、名色、六入、觸、受、取、有、生、老死是なり。弘法大師は此の十二因縁を表はして字畫に十二點を添筆したりと。

●やつす 文字の畫を省き順すことをやつすといふ。

●戀の文 左程貴き文字といふ事し知らず、之を弄して麗文を書き或は人を欺き或は陥れ遂には一命をも奪ふに至る、其の罪の深きこと海の如しと。

●傾國 傾城といふ。「漢書」に「北方有佳人絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。又白樂天の長恨歌にも「漢皇重色思傾國」などより起る。遊女の色に迷ひて家産を失ふもの多きより、昔しより傾城といひ傾國といふ。

●好色 好色の文字は、「源氏物語」に出で、貞享元祿大流行の詞なり。

●嵯氏 顔西施のなまき。嵯氏は越王句踐より吳王夫差に献したる女にて、共に傾國の美人なり。

●妹背山 紀伊國に妹山脊山とて吉野川を隔て、さし向へる二つの山あり、これを妹背山といふ。

加し若きかたぐ男女に限らず、戀せし人は文玉章をひとつに供養し、ともに成佛し給へ。地玉章塚の勸進と、たからかによははり勸進帳をさし上て、さも殊勝にぞ讀上げる、摩訶般若波羅密、華嚴阿含方等涅槃、八萬餘教は佛一代の御說法、皆是衆生成佛の外他事なし、今無佛世界にいたつて佛の教を傳る事、文字なくして何を以てか傳へん、されば文字のはじまりは、蒼頡といつしもの、フシ眞砂に遊ぶ、濱千鳥、其の足跡を見そめしより、鳥のあとたへずよゝに傳へて寶とす、一字一に佛の妙諦そなはりたり、我朝にては弘法大師十二因縁を表し、フシ十二てんをそめ給ふ、文字一字よく書は佛一體作りし道理、やつして書は佛の五體を

破るとかや、かゝる貴き文字をや末世の衆生淺ましく、墨と硯の戀の文、フシ思ひ參せ候べく候、フシ心をなやまし思ひをくだき、玉章にて命を取、煩惱の山輪廻の海、見れば高く臨めば深し、爰に傾國好色の遊君、花岳芳春處氏が顔西施がなまき、戀慕内に動て色外に、フシはなやか也、百束千束の玉章すべて夫の心を迷し、筆魂をつんざく終に愛着の夢さめず、廿二歳の、フシ花散りぬ、臨終の、夕霧六道に迷ひ給はん事かなしむべしや歎くべし、依て一生の縁花を、集めくゝてみよしの、フシ吉野の奥の妹背山、玉章塚と名付て是がために、フシ建立し煩惱即菩提をいのる、法界に自他なし後世といひ現世といひ、半錢半紙の供養の輩ともに結縁利

相を示す名目なり。即ち無明、行、識、名色、六入、觸、受、取、有、生、老死是なり。弘法大師は此の十二因縁を表はして字畫に十二點を添筆したりと。

●やつす 文字の畫を省き順すことをやつすといふ。

●戀の文 左程貴き文字といふ事し知らず、之を弄して麗文を書き或は人を欺き或は陥れ遂には一命をも奪ふに至る、其の罪の深きこと海の如しと。

●傾國 傾城といふ。「漢書」に「北方有佳人絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」。又白樂天の長恨歌にも「漢皇重色思傾國」などより起る。遊女の色に迷ひて家産を失ふもの多きより、昔しより傾城といひ傾國といふ。

●好色 好色の文字は、「源氏物語」に出で、貞享元祿大流行の詞なり。

●嵯氏 顔西施のなまき。嵯氏は越王句踐より吳王夫差に献したる女にて、共に傾國の美人なり。

●妹背山 紀伊國に妹山脊山とて吉野川を隔て、さし向へる二つの山あり、これを妹背山といふ。

けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど  
 けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど  
 けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど

けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど  
 けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど  
 けいせい乃  
 のち世の  
 物ありは  
 ちりめけ  
 心あがど

三世相

三世相



六一

六一

(載所葉圖家訓用女) 國 傾

益のたね、成佛疑ひあるべからず南無奇妙筆視童子、  
 玉章塚を守護し給へ、南無阿彌陀佛と、地讀み上しは  
フシ有がたくこそ聞えけれ、地家々の男女感じてや思  
 ひくの勧めに入、古き反古玉章を共に供養と出しけ  
 る、かれとは知らて左京進の北の方、人目もわかず走  
 り出、静三が衣の袖にすがり、近頃たふとく覺へさ  
 すらふ、扱みづからは去人の妻成しが、地又異人に心を  
 かけられ玉章度々成けるを、はづかしや繼子の憎さに  
 あの子を殺さばなびかんよし、返事致候へば繼子は殺  
 さず却つて夫を殺され候、今においてかの男靡けく  
 と責めせたげ候へども、間男の罪おそろしくとやかく  
 いひぬけ申也、則是はかのものゝ付たる文、みづから

● 惡に強ければ善にも強し、惡人  
 などが一念發起して善行かなす時  
 など、極端より極端に走るの譬へ。

が返事も有共に供養し、未來を助けたべかしと、さめ  
 くぞ泣かれける、静三もそれとは知らず、扱々惡  
 に強ければ善にも強し、左程に思召は女の一心は爰に  
 てあり、實の夫を殺させ何しに浮世を立給はん、地發  
 心とげて菩提に基き給へと有ば、北の方聞給ひいや發  
 心迄も候はず、死んと思ひ定め是迄は忍び出たれども、  
 何れもにあひ奉るも二世の縁、御弟子になしてと袖よ  
 り髮剃取出し、髮ふりほどき根よりふつと切給へば、  
 チ、頼もしき發心者極樂の友達、めでたしくうれし  
 くと、フシ涙を流し悦びける、爾さあ見咎められては本  
 意なし共に立退き申へし、いざ諸共と一二町も行ける  
 所へ、兵庫守いさをばかりに走り來り、エ、爰にこそ